
DESPERADO

～ Dr**佐々木**シリーズ～

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DESPERADO

～Dr佐々木シリーズ～

【Nコード】

N5298K

【作者名】

杜若

【あらすじ】

ニューヨークで発生した地下鉄爆破テロ。

実行犯の女性テロリスト、それを追う二名の鉄道警察官

そして、学会出席のためにニューヨークを訪れていて

事件の被害者達の治療にあたることになった佐々木と王

アメリカが正義と信じて行ってきた戦争は何を生み出したのか。

はたして「悪」とは何なのだろうか。

第一話（前書き）

短編として上梓した「連鎖」そして以前中編として掲載していた同名小説を

あらためて長編連載作品として書き直したものです。

正義の名のもとに行われた戦争は、何を生み出したのか。
「悪」とはなにか。

テロリスト、刑事、医師の視点から描くサスペンスです。

主要登場人物の医師二名 王と佐々木の関係をもっと知りたい方は
「糸」「砂の船」をお読みください

前日投稿したものはすっかり短編のカテゴリーをチェックして
しまいました

改めて長編連載として 一話 二話をUPいたします

第一話

Desperado, why don't you come
to your senses?
You been out ridin' fences for
so long now
Oh, you're a hard one
I know that you got your reasons
These things that are pleasin'
you
Can hurt you somehow

ラジオから流れ続ける題名も知らない曲を聞きながら
ステンレスのボウルに入った材料を入念にかき混ぜていたレイラ
は、

ふと戦時下の食料統制が厳しい中、どうにか最低限の材料を集めて
息子のために砂糖祭りのケーキを焼いた日の事を思い出した。

「お母さん、これ、全部食べていいの？本当に？」

何度もレイラに尋ねた後、目ばかり大きく見える痩せた顔に満面の
笑みを浮かべ

息子はケーキにかぶりつき、美味しいと歓声を上げた。

息子が死んだのはその二時間後だ。全部食べていいと言ったケーキ
を半分残し

「お父さんを迎えに行ってくるよ。かえったら一緒に残りを食べる
んだ」

と外に飛び出して、二度と帰ってこなかった。民間人には決して銃
を向けないはずの
アメリカ兵に撃たれたのだと知ったのは、ずっと後の事だ。

ごめんね、イマード。

記憶の中の息子に微笑み返ししながら、レイラは胸の中で謝る。

部屋いっぱいに広がる甘い香りや、手の平にベタベタとまとわりつく生地は

確かにケーキみたいだけれど、砂糖や卵の代わりにガソリンやジオクチルを入れ、

ナッツやドライフルーツの代わりに小さな鉛玉や鉄片を混ぜ込んだこれは

お菓子ではなく、凶器。

混ぜ上がったそれをオーブンに入れる代わりに、ボウルごと熱湯を満たした鍋に入れ
ガソリンを揮発させればプラスチック爆弾、通称C-4が出来上がる。

下町の安アパートでも製造可能なのに、破壊力はダイナマイトの五倍で、

変形も持ち運びも容易だ。

長方形に成形したそれを、レイラは繊細な縁取りの紙レースとセロファン、そして

色鮮やかな包装紙で包みこむ。リボンを巻けば、アーモンドの香りも手伝って

何処から見てもケーキだ。しかし、念には念を入れて小さなバースデーカードも添える。

そういえば、あの時の砂糖祭りは息子の五歳の誕生日だったと、

粘土で汚れた服を脱ぎながら、レイラは思った。

イマード、喜んでくれるか判らないけれど、お友達をもうすぐ沢山貴方が今いる場所に

届けてあげる。

記憶の中の息子に語りかけながら、レイラは適度に華やかな新しい服に袖を通す。

きつと他人が見れば、ケージ持参でバースデイパーティにでも向か

う途中に見えるだろう。

「さあ、^{ジハード}聖戦を始めましょう」

鏡の中の自分に呟くと、レイラはきれいにラッピングされた爆弾を持って二度と帰らぬ

アパートの扉を閉めた。

ニューヨークの地下鉄は駅と駅の間隔がとても短く、電車が十分で走る距離に七つの駅がある。

時間どおりに運行されることはまれだが、渋滞とは無縁の交通手段として人気があった。

時刻は午後3時。買い物や観光の乗客に加えて、遠足帰りの幼稚園の生徒たちで車内は込み合っていた。

「あれ、あの人荷物を忘れていったよ」

とその中の一人が、扉が閉まる寸前に駆け下りた女性客が座っていた席に残された紙袋を指差す。

「ケーキかな」

「いい匂い」

たちまち沢山の子供たちが袋の中を覗き込む。

「こらこら、忘れ物を勝手にいじっちゃ駄目、次の駅で駅員さんに届けましょね」

先生の言葉に、じゃあそれまで私が持つ、いや僕がと喧嘩が始まった。

「はいはい、じゃあ見つけたジェリーが持っていてね。つぶしちゃう駄目よ」

指名された男の子は嬉しそうに笑うと、紙袋を大事そうに抱きかかえた。

ふわりと鼻先をくすぐる甘い香りに、

そう言えば今日のおやつは何かなとジェリーが考えた時、

青白い閃光と鈍い音と共に、大事に胸に抱え込んでいた荷物は爆発し、
車両は炎と悲鳴に包まれた。

続く

第二話

「もう私物の整理ですが、早すぎますよ」

苦笑しながらコーヒーの入った紙コップを渡してくれた後輩に、ケネスも同じような笑みを返した。

「なにせ三十年分だからな。少しづつ持って帰らんと。」

映画のように退職当日、小さな段ボール箱を小脇に抱えて、と言うわけにはいかないさ」

ひっかきまわしたデスクの引き出しの中には、実に様々な物が詰まっている。

書類、何かのメモ、領収書。歯ブラシや安全カミソリ、タオルがやたらと出てくるのは

それだけ多くの夜をここで過ごしたことの証だった。

ニューヨーク市地下鉄警察本部。

犯罪多発地域であるこの街の地下を網の目のように走る、

鉄道で起きた事件を専門に取り扱う部署。

ケネスはここを後1カ月で定年退職する。

「おや、こんなものがあつた。ちょうどいい、前のが割れちゃったばかりだからな」

一番底から出てきた小さなスタンドタイプのミラーをデスクに置くと、

少し曇った鏡面に白髪まじりの縮れた髪をした黒い肌の自分と、

ブロンドの髪に若々しい白い肌の後輩の姿が映る。

「そりゃあ判りますけど、なんとなく寂しいじゃないですか」

「なんだマイク、普段はひよっこ扱いされるのを嫌がるくせにいざとなつたら一人立ちが怖いか」

「そんなんじゃ、ありませんよ」

顔にさつと朱を上らせて、マイクは反論する。

それを見てケネスはすまんと笑いながら謝った。

感情を隠す事も出来ない純朴な坊ちゃんが凶悪な犯罪者と立ち向かえるのか、

と彼が配属された当時は秘かに心配したもののだが、中々どうして大した根性で

マイクは決して親切な指導者とはいえなかった自分とコンビを組み続けてくれた。

大丈夫、俺の知っている事は全部お前に教え込んだ。

今度はお前が新人をリードしろ。

照れくさいから心の中で、しかも鏡の中の後輩にそつと呟いた時、全てのデスクの上の電話がけたたましくなりだした。

「地下鉄車両、及び駅構内で大規模な爆破事故が発生、テロの疑いあり」

一瞬の静寂の後、室内に響き渡った声に署員全員に緊張が奔る。

「行くぞ。テロか純粋な事故かだけでも即急に見極めにやならん」

やれやれ、この街はぎりぎりまで自分をこき使うらしい。

鏡の中の初老の黒人男性に今度は小声で呟いて、

ケネスは足早に部屋を出ていく。

その後をマイクが慌てて追った。

「以上で発表を終わります、御清聴ありがとうございます」

佐々木が壇上で軽く一礼すると、拍手と共に会場が明るくなる。

その片隅で王が親指を立てて自分に向かって笑いかけているのを見つけて、

やっと強張っていた表情が緩むのを感じた。

「御苦労さん、嫌がっていたわりには

中々堂に入った話しっぷりだったぜ、佐々木君」

「お前が発表すると言っていたのに、

直前になって籤で決めようなんて言い出すからだろう。

お陰で寿命が縮んだ、責任を取ってくれ」

「医学的に証明できたらな、まあなんにせよ無事に終わってくれてよかった。」

突っ込んだ質問もされなかったしな」

「まっただ」

スーツ姿の男女がごった返す広いホールの一角で、

佐々木と王はサービスの飲み物片手に安堵のため息をつく。

第一線で働く臨床医から大学の教授まで集まる

年に一度の大規模な精神医学学会で、二人はつい先ほど

共同執筆した論文の発表を終えたばかりだ。

「二人ともせっかく専門医になったんだから、論文の一つも発表してもいい頃よ。」

ちようど三か月後に学会がニューヨークであるから、そこでやりなさい」

という院長の気軽な一言で決定した事だったのだが、言われた方にしては一大事である。

普段の勤務を抱えた上での論文制作は予想以上に大変で、

学会三日前から佐々木は王の部屋に泊まり込んで

「いい加減シャワーくらい浴びて、きちんとベッドで寝なさい」

と彼の母親に呆れられる生活を送ってようやく今日にこぎつけのだ。

「佐々木君」

「岡本先生」

不意に肩を叩かれて佐々木が驚いて振り返ると、

そこには彼をアメリカに送り出してくれた上司が

にこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

「いらしていたのですか、連絡して頂ければ空港まで迎えに行つたのに」

「君がそう言うと思って黙っていたんだ。」

論文を発表するまではそれに集中したいだろう。

聞かせてもらったけど見事だったよ」

「そんな」

耳まで赤くなつてうつむく佐々木に、岡本はもう一度笑う。

「あの論文を聞いて君をアメリカに送り出してよかったと思つたよ。遅くなつたけど専門医合格おめでとう」

「ありがとうございます」

岡本の温かい言葉に、佐々木はもう一度深く頭を下げる。

インターン終了後僅か1年の勤務実績しかない自分を、

小児精神科のフェローシップ（専門研修医）として

小児の精神治療では全米でトップクラスの

規模と実績を誇るカリフォルニアの病院に送り出してくれたのだ。

いくら感謝してもし過ぎる事はない。

「えつと彼は同僚かな？」

「はい、俺と同時期に専門医になつた王陰月医師です。^{ワシインユエ}

王、こちらは俺の日本で勤めていた病院の診療部長の岡本先生」

「はじめまして、中国からの留学医師？」

「こちらこそ、いえ、祖父が頑固なので中国式の名前を名乗っていますが」

中華系三世の生粋のアメリカ人ですよ」

佐々木の紹介で二人は握手を交わす。

「佐々木君は良い同僚に恵まれたようだね。論文の出来もさることながら、

日本にいたころよりもずっと明るくて良い顔をしている。

帰国後が今から楽しみだよ。あと半年、しっかりと頑張つて下さい」

「はい。全力で」

佐々木が頷くと岡本はじゃあまたレセプションで、と言い残し、人ごみの中に消えていった。

「レセプションは十九時からだし、

俺たちもちよつと出るか。外の空気が吸いたい」

「同感」

締め慣れないネクタイを緩め、二人が連れだって会場をでると晩

秋の短い日は、

すでに最後の一片を空の端に残すだけになっていて、冷たい風が吹いていた。

「流石に寒いな」

「カリフォルニアが暖か過ぎるんだよ」

観光資源にもなっている美しい夜景を見ながら歩いて、たどり着いたのは巨大なクリスマスツリーの点灯式で

日本でも有名なロックフェラービルだ。

「まだ点灯してないんだな」

「11月だからな、でもスケート場はやってるぜ。ほら、コーヒー」
「ありがとう」

差し出されたじんわりと熱さが伝わってくる紙コップを、佐々木は両手で包むようにして受け取った。

「TVでおなじみの光景が目の前にあると、なんか妙な気分だな」

「九時間と少し、か。案外近いんだな」

「何が？」

「カリフォルニアから日本までのフライト時間だ。

ニューヨークまでは六時間だったから、

映画を一本余計に見ている間に、着く」

そう言つてコーヒーを啜る王に、佐々木はああ、と頷いた。

「あと半年、か。長いようで短かったよ」

それだけの時が過ぎれば、彼とは同僚でいられなくなる。そう思うと胸の中に

ずっと外と同じ温度の風が吹き込んだような寂しさを覚えた。

「コウベとかいう都市に会ったことのないけど親戚がいるし、京都や東京にも行つてみたい。

案内しろよ、休暇が取れたら押しかける」

「もちろんだ」

「ミナはああ見えて順能力が高いんだ。もともと生まれが日本だし、日本語もすぐに覚えちまうだろうなあ。寂しくなるけどしょうがな

い」

「う、うん」

佐々木はさつきよりも曖昧に頷いてコーヒーを啜った。彼の法律上の従姉妹で同じ病院に勤める

内科医のミナと付き合い始めてそろそろ一年になる。

いくら情報伝達手段が発達しているからとはいえ、大西洋を挟んだ遠距離恋愛など続くわけがないし

年齢から考えて王は自分とミナが結婚して

一緒に日本に帰ることを当然と思っているらしいが、

今のところ二人の間でこの件を話しあつたことは一度もない。

「失礼、身分証を見せていただけますか」

突然背後から二人の間に割り込んだ警官に、

またかため息をつきつつ二人は携帯していたIDカードを見せる。

「これで三回目だぜ。そんなに不審そうに見えるのか？俺たちは」

それを確認し、鷹揚に頷いて去って行った警官の後ろ姿に王が呟いた。

「俺のせいかな」

呟いてうつむく佐々木の両の眼もとから顎までには、かなり目立つ傷痕がある。

コートの袖から覗く右手にも同じようなものがあり、

それに胡散臭げな視線をすれ違いざまに向けていく人も多い。

親が企てた無理心中に巻き込まれた際に負った傷だが、事情を知らぬ人から見ればさぞ気味悪く見えるのだろう。

「そんなわけないだろう」

いつものように身長が頭一つ分低い佐々木の長く癖のある髪をぐしゃぐしゃとかきまわしながら、王はことさら強い調子で言った。

「あのテロ以降ニューヨークがやたらと有色人種に厳しくなったのは評判だろ、

それにしても今日は異様にパトカーが多いな、何かあつたのかもしれない」

王の言うとおりの目の前の通りを次々と

サイレンを鳴らした警察車両が走りさっていく。

佐々木はそれを何げなく目で追っているうちに、

まだ通りの案内板に『世界貿易センタービル』の名前が残っている事に気付いた。

超高層ビルに飛行機が突っ込むという映画の中のような

テロが起こったのはまだ佐々木が日本で医大に通っていたころだった。

随分と昔の事のように感じていたのだが、

実際はまだ街のあちこちに痕跡が残っている程度の時間しかたっていない。

「日が落ちると流石に寒いな、そろそろ戻るか。

飛行機は午後だし観光はまた明日すればいい。

ミナに何を土産に買って帰るんだ」

「まだ考え中」

「もうすぐクリスマスだろ、精々奮発しろ。……ちょっと待ってくれ、電話だ」

と王はコートのポケットから携帯電話を取り出す。

「はい、……なんだって」

さっと顔色を変えた友人に、佐々木がどうした？

と問いかけた時、自分の携帯電話も鳴りだした。

勤務先の病院からだ、なんだろう。

学会でニューヨークにいることは職員のほとんどが知っているから、よほど緊急の用件か。

胸騒ぎを覚えながら通話ボタンを押して、聞こえてきた声に驚いた。

「佐々木、TVのニュースを見た？ ニューヨークで何が起こったか知っている？」

「院長先生、どうしたんですか」

「まず質問に答えて頂戴」

典型的な田舎の陽気な老婦人といった容姿にふさわしい穏やかで

優しい声が、

今は強張り、震えてすらいる。こんな院長の声を聞くのは初めてだ。
「いえ、今発表が終わったところで何も知りません、何があったんですか」

「地下鉄で大規模なテロが起こったの。」

電車が五両と駅が三つ爆弾で吹き飛ばされて

死傷者は未だに予測がつかないわ」

「なんですって」

先ほどからパトカーがやたらと多かったのも、

頻繁な職務質問もそのせいだったのか。

「ニューヨーク市はテロの被害者の為にM病院付属の

S教会を専門の治療施設にすることを決めたわ。

今は医師をかき集めている最中。佐々木、うちの病院からも

貴方と王を治療に派遣することに決めました」

「治療って、先生、俺たちは精神科医ですよ。」

外傷の臨床からは何年も離れています。役に立てるとは……」

「注射や点滴もできるし、素人より役に立たないとは言わせないわよ。」

それに貴方達が本当に必要とされるのは、多分明日以降。」

「どうしてですか」

「今はそれをぐだぐだと説明している暇はないわ、とにかくS教会に行って指示を仰ぎなさい。」

佐々木、全てを抱えこめとは言わないけれど、全力を尽くしなさい」

「はい」

まだ言われた事が良く飲み込めないまま返事をして電話を切ると、同じように困惑顔の王と目があった。

「誰からだ」

「院長、俺達をテロの被害者の治療に派遣することに決めたって」

「こっちはM病院からだ。至急こい、だそうだ。」

テロが起きたのが15時で、やっと救助が始まったらしい」

「行ったところで役に立つのか」

「さあな、とりあえず行くしかないだろう」

そう言つて王は手を上げてタクシーを止めた。

「失礼、電話をもらつた小児精神科医の王と佐々木です」

「ああ、待っていたよ。白衣と聴診器はこれを。」

それからこのリボンを肩口につけて。

皆知らない者同士だからリボンの色で専門を見分ける為だ。

赤が救急救命医で黄色が外科医、白が整形外科医で、君たち精神科医は青だ。

今日は当病院のアスラン医師の指示を仰いでくれ」

到着したM病院に付属するS教会はすでに白衣姿の医師達が大勢集まっていた。

付属と言っても地域の教会も兼ねているのだろう。

メガ教会と呼ばれる千人以上を収容できる大きな建物で、そこに治療器具、薬剤などが続々と運び込まれている。

長椅子は臨時のベッドになるようだ。

「よろしく、アスランだ。君たちは精神科医だそうだけど、勤務はどここの病院で？外傷の治療経験は皆無か？」

「佐々木、兵衛です」

「王陰月。カリフォルニアの××精神病院勤務。」

佐々木は日本人だけど英語の意思疎通は問題ない。

小児精神科専門医だが、二人共精神病救急科での勤務も行っている。重症の外傷患者の治療経験はインターンの時に半年だ。佐々木は？」

「日本でインターンの時に、救急救命室で同じく半年間」

手を差し出してきた長身で茶色い巻き毛の医師の肩口には赤いリボンが揺れている。

その手を握り返しながら、二人は手早く自己紹介をした。

「精神科とはいえ救急科勤務の実績があるならありがたい。軽傷患者の治療は任せられるな。」

君達が本当に必要とされるのは多分明日以降だ」

院長と同じ事をアスランは言った。

「今日、君達は教会の入り口で患者を選別してもらった。

現場で救急隊員がトリアージタグをつけているが、もう一度ここで確認して各専門医に引き渡してくれ。

その時の患者の取り扱いには十分に注意して、

不自然な衣服の下膨らみや腹部の張りには特に、ペットボトルを携帯していたらその内容物にも。」

「昨年のテロの教訓ですか」

王の言葉にアスランは頷く。

昨年、同時多発テロの追悼式の日、小規模な爆弾テロが起こった。

死者はなく怪我人は全て最寄りのERに搬送されたが、

その中に怪我人を装ったテロの実行犯が紛れ込んでいたのだ。

ペットボトルに詰められた液体状の爆弾が処置室で爆発し、医師三名と看護師二名、

そして命が助かった事を家族で喜び合っていた本当の怪我人五名が犠牲になった。

このニュースはその日のうちに全米を駆け巡り、以来大部分の州で一定量以上の液体は公共の乗り物や建物に持ち込み禁止となっている。「そうだ、患者をすべてここに収容するのもその為だ。」

彼らは犠牲者でもあり、容疑者でもある。

どうか気を抜かずに対処してほしい」

硬い表情で二人が頷いた時、サイレンの音を響かせて次々と救急車が教会の前に到着する。

「五歳、両腕切断でひん脈」

「四歳、広範囲の熱傷。気管が腫れて挿管できません。血圧は100-65」

緊迫した声を張り上げて、救急隊員がストレッチャーに乗せられた

小さな身体を

駆け足で運び入れる。

「六歳」「五歳」

「なぜこんなに子供ばかりが」

瞳孔の反射や呼びかけ、痛みに反応するかなどを調べながら
佐々木が悲鳴に似た声を上げる。

「小児外科医、直ぐに来てくれ!!」

「爆破された地下鉄に遠足帰りの幼稚園児が百名近く乗っていたんです」

返されたやはり悲鳴のような救急隊員の声に、

「最悪だ」

と王は呟いた。

続く

第三話

どつしりとした木製の扉を開けると、鉄さびと消毒薬の混じった何とも言えない匂いが

二人の鉄道警察官を包んだ。

顔をしかめるマイクと、どこか懐かしそうな表情を浮かべるケネス。テロの被害者が臨時で収容されているM病院付属のS教会。

テロ発生から二十四時間が経過しているので、

被害者たちは皆しかるべき治療がなされ、

軽傷者は帰宅し、重傷者は機械に取り囲まれたベッドに横たわっている。

その間を足早に動き回っているのは医師や看護師達。

枕元でじつと動かないのは恐らく患者の家族たちだろう。

おぞましくも、懐かしい光景だとケネスは思う。

四十年程前の前線から一步退いた野戦病院とそっくりだ。

枕元の家族がおらず、ベッドに横になっているのが

子供でなく、若い兵士だったという違いはあるけれども。加えて……。

一つのベッドの枕元で悲痛な声が上がった。

脇に立つ白衣の青年が壁の時計を見て何かを告げる。

悲痛な声が一層大きさを増す。

ケネスは心の中でテロの犠牲者の数を一名上書きした。

足音とフラッシュと共に、何本かのマイクが一斉に泣き崩れる家族につきだされる。

マスコミか、これはあの時にはなかったな。

かわりにうだるような熱気と病気を仲介する蚊がわんさといた。

「そつと、しておいてやればいいのに」

隣にいたマイクが忌々しそうに舌打ちする。

ケネスは小さくうなずいた。病院側としてもマスコミを追い出した

いのだろうが

そうするとパパラッチのように強硬手段に出られるかもしれない。だから、苦肉の策として大手新聞社やテレビなど

まだ節度ありそうな連中だけに取材を許可したのだろう。

彼らにとつては部数や視聴率を伸ばす絶好の素材なのだ。このテロは。

英語に混じって聞き慣れない言葉も飛び交う、

外国のメディアもいるのか。その中で

「ドクター、日本の方なんですか。是非お話を」

聞き覚えのある懐かしい外国語がケネスの耳に届いた。

亜熱帯の国に送り込まれる前に派遣されていた極東の国の言葉。

見れば先ほどの白衣の青年にマイクが突き付けられている。

後輩よりずっと若く見える、

顔に目立つ傷のある青年はどうやら医師だったらしい。

「この状況が見えないのか、話す暇があつたら患者を診ます。失礼」

男にしては甲高い声できつぱりと言い切つて立ち去つて行く医師に、

ケネスは拍手を送りたい気分になった。

ふと気がつくと、隣にいたはずのマイクがない。

慌てて辺りを見回すと、手で口を押さえて教会を出ていくところだった。

「すいません、なんだか気分が悪くなつて」

「ああ、構わん。少し休んでろ」

少し離れたベンチに腰を下ろした後輩にそう言つて、

ケネスはポケットから古びた写真を引つ張り出した。

少し不鮮明ではあるが、将来かなりの美女になりそうな

少女が気の強そうな眼差しでこちらを見返していた。

レイラ。本名か偽名なのかは判らないがそれが彼女の名前、そして

「イスラム系国際テロリスト。マナスの幹部で百三十名の犠牲者を出した

このテロの、主犯」

ケネスの呟きは、晩秋の冷え切った空気の中に瞬く間に溶けていく。この国は、ほんとうに懲りると言う事を知らない。四十年前あれほど痛い目にあったと言うのに同じような事を繰り返して、また、悲劇がおこった。今度は声に出さずに胸中で呟いたケネスの左手には、醜く引きつれた広範囲のやけどの跡があった

ニュースキャスターが読み上げるテロの犠牲者の数が増えるたびに、室内の熱気が徐々に高まっていくのをレイラは肌で感じる。

うちっぱなしのコンクリートの床に置かれた

旧式のブラウン管のTV以外照明も暖房も付いていないのに、羽織っていたコートを脱ぎたくなった。

「妹と甥は、立派だったわ。今頃父と天国で再開して褒めてもらっている。」

ありがとう、レイラ。貴方のお陰で諦めていた復讐が果たせた」

東洋と西洋の血が長い時間をかけて混じり合った

民族特有のくつきりとした大きな瞳に涙をためて、隣の女性が呟く。

「いいえ、貴方達が勇気を出してくれたからよ」

その肩を抱きしめながら、ケーキに偽装した爆弾を車内に置き去りにした女は答えた。

私達が祖国で苦しんでいる間、長い事この国で怠惰な平和をむさぼっていた

貴方達にはこの位の役目を引き受けてもらって丁度いいのだけども。

胸中で吐き捨てながら、しかし顔には女の顔に浮かぶのは慈愛に満ちた笑み。

C-4の製造で手についた油脂を落とすために強力な洗剤を使い続

けたため

すっかり荒れてしまった手に、女性の被ったスカーフの優しい絹地の感触が心地よい

この国に来て二年、彼女達と接触して一年、やっと計画を実行に移す事が出来た。が、

室内の女性達全てが達成感に満ちた様子の中、
一人レイラだけが心に巨大な穴があいたような虚無感を噛みしめていた。

TVの中のキャスターが、死者が百を超えたと震えを隠しきれぬ声で告げると、

誰からともなくコーランの一節を唱え始め、

じきにそれは斉唱となつて室内の空気を震わせた。

「まだよ、まだ足りない」

その中でレイラだけが別の言葉を、

飢えた獣の眼つきでテロの惨状を伝え続けるTVに向かって吐き捨てた。

そして、翌日。

「これだわ」

同じテレビ画面を見つめ、レイラはにやりと笑う。

そこにはテロの被害者が収容された

M病院付属のS教会の様子が映し出されていた。

突き付けられたマイクに向かって、

黒い髪の小柄な青年が理解できない言葉で叫び返している。

そして、その肩を宥めるように叩く、同じ色の髪の大柄な青年。

そして二人はまたあわただしくベッドにと駆け戻って行く、

どうやら医師らしい。

多分、彼らが全力を尽くしてようやく助けた命達。

これらをもう一度吹き飛ばしてやったら

こんどこそこの胸に開いた巨大な穴がふさがるかもしれない。

二日後、一年行動を共にした同じ国の女性達に最後の指示を下して、

レイラはアジトにしていた家を出た。

「警官がここを嗅ぎ付けたら、渡した銃を撃ちまくって抵抗しろ」
この言葉に素直に頷いた女性たちの顔を思い浮かべながら、

レイラは十分に離れた場所の公衆電話から警察に電話を入れる。

「テロに関わりのある人物が出入りしている家がある住所は……」
それだけ言って相手が名前を尋ねる前に受話器を置いた。
これで少しは時間が稼げる。

受話器を置いた瞬間に、女性たちの顔は綺麗に消え失せていた。
使い終わった道具をいつまでも覚えてはいられない。

まだ警戒態勢が敷かれたニューヨーク。

かばん一つを抱えてレイラは雑踏の中に紛れ込んだ。

続く

第四話

「ジョン・スミス6歳両手と顔に軽度熱傷。

経過は良好だが夜尿症と夜驚の症状あり、電車の音、轟音に怯える

……」

ICレコーダーから流れ出る自分の声を、

佐々木は一心にカルテに書き写していく。

ペンを握る手が軋むように痛み、時折書いている字が霞んで読めなくなる。

それをこらえてもう一枚、書きかけのカルテを目の前に置いた。

テロ当日から十日が過ぎた。最終的に犠牲者は死者百三十人、

重軽傷者は二五〇人以上となり、

現場には死者の半数以上を占めた幼い子供達の為に

おもちゃや花が山と積まれ、TV は連日悲しみにくれる家族を映し
犯人の情報提供を呼びかけている。

被害者の治療のためにニューヨーク中からかき集められた

医師達の半分以上が自分達の勤務する病院へと戻り、

被害者達は臨時の治療施設だった教会から

M病院の一棟に纏めて移され、平穏なとはいかないが、

事件の前と見かけは変わらない日々が戻りつつある。

だが、それに反比例するように佐々木と王の受け持つ患者はその数を増していった。

平穏な日常が突然崩れ去り、目の前で大勢の人々が死んでいった事件は被害者、

特に子供達の心に目には見えないが深い傷を刻んだ。

大人ほど豊富な語彙を持たない子供の心の悲鳴は身体の不調となって現われる。

佐々木と王は朝一に小児科や外科のドクターと共に被害者達を回診し

経過は良好だと言われながら、痛みや不快感を訴える子供たちの話を聞き、

それが終わると同じ理由で通院してくる被害者の診察に明け暮れた。本来小児の精神疾患は診断だけでも時間がかかる。

佐々木達の勤務している病院では専門医とレジデント、

そして複数の看護師と心理士がチームを作って

お互いをフォローしあいながら治療にあたっていた。

だが、ここでは診断から最低限の治療まで一人でこなさなければならぬ。

食事や休憩の時間をすべて返上しても一人の患者と話せる時間は十分以下で、

後は付き添いの大人から症状を聞き、機械的に薬を処方するのが精いっぱいだ。

怖い、苦しいと訴える子供たちにそんな治療しか出来ない自己嫌悪と

早朝から日付が変わるまで治療に追われる身体的疲労が心と体、両方を鉛のように重く疲弊させていく。

ニューヨーク市から宿舎として病院にほど近い小奇麗なホテルを提供され、

食事も中のレストランからルームサービスまで無料だと言われても食欲など真っ先に減退してしまい、近くにある日本食材が豊富なストアから

豆腐と醤油を買ってきてそればかりを食べて過ごした。

と、卓上の電話が鳴った。

小さく舌打ちして佐々木はカルテを書く手を止めて、受話器を取る。

「Mr. 佐々木。外線からお電話が入っております」

慇懃なフロントマンの声が終わった直後

「あの、佐々木先生ですか。私は日本のY新聞社の者ですが、先生が今回のテロ被害者の方々の精神的ケアを行っているとお聞きして、

是非お話を……」

まるで機関銃のように喋りはじめた相手に佐々木はうんざりとしたため息をついた。

「すいません、今はそんな時間はないんです」

「あの、もしもし、もしもし」

喋り続ける相手に構わず受話器を置いて、もう一度大きなため息をつく。

一体どこで情報を仕入れてくるのだろう、

この手の電話はテロ当日から途切れることなくかかってくる。

携帯は留守番電話のメッセージが二十件を超えたのを見て以来、

電源を入れていないが、ホテルの電話までは線を引っこ抜くわけにはいかない。

――所詮は、他人ごとか――

再びカルテにペンをはしらせながら佐々木は思う。

悲しみにくれ、やり場のない怒りを持てあますのは事件の犠牲者や、それに関わるごく一部の人々だけ。

その他大勢にとってはこのテロ事件は退屈な日常を

忘れさせてくれる絶好のショーに過ぎない。

特にマスコミにとっては部数や視聴率を伸ばす絶好のチャンスなのだろう。

――人の事は言えないけれど――

数年前の同時多発テロ事件の時も、もつと昔、

十代の半ばに起こった阪神大震災や地下鉄サリン事件の時も

テレビの前に座っている時間が長くなり、普段買わない雑誌を買った記憶がある。

所詮人は、自分がその渦中に巻き込まれない限りどんな悲惨な事件でも楽しめてしまうのか。

どんよりとした重苦しい気持ちでもう一度ため息をついた時、ノックの音がした。

「俺だけど、入っていいか？」

「王？どうぞ」

返答すると同時にフォア・ローゼスの瓶を片手に入ってきた同僚は自分と同じく酷く疲れ切った顔をしていた。

「まだやっているのか、カルテの記録」

「追加だよ。現場で書ききれなくて録音したものを書きつつしているだけだ。」

詳しい病状を書いておけば、引き継ぐ医師や心理士の参考になる」

「よくやるな、俺は殴り書きが精いっぱいだ」

「速記は殴り書きとは違うだろう。」

君だってホテルで清書をしているくせに。で、何の用？」

「今日はもう飲んだのか、薬」

机の上の睡眠導入剤のケースを指差しながら尋ねる王に、佐々木は首を振る。

身体は限界まで疲弊しているのに、ベッドに横になるとテロ当日の犠牲者の姿や

今も不安と恐怖に苦しめられている子供たちの顔が浮かんできて薬に頼らねば眠れない日々が続いていた。

「なら付き合え。薬よりはいいぞ、多分」

そう言つて酒瓶を机の上に置いた同僚に、

佐々木は頷いてカルテをバインダーにとじた。

TV のバラエティ番組の空虚な笑いをBGMに二人は無言で杯を重ねる。

「初日、何人の患者を診た」

ようやく王が口を開いたのは、瓶の中身が空に近くなったところだ。

「覚えていない」

琥珀色の液体が底にこびりついたグラスを弄びながら佐々木は答える。

「俺もだ。初めてだったよ、あんなことは」

「俺だってそうだ」

名前を尋ねるところか顔を見る暇もなく、ただ目の前に運ばれて

くる

犠牲者のトリアージタグを確認、触診をして専門医に引き渡す。ようやく軽傷者の治療を始められた時は夜が白みはじめていた。

「俺はあの時ずっと言い訳をしていた。重症な外傷治療なんて何年もしていないから、

患者を救えなくてもしょうがないって」

「……王」

じつとグラスの中の溶けかけた氷を見つめながら言葉を紡いでいく同僚からは、

強すぎるコロンの匂いがする。

いくら服を着替えても教会に充満していた血と煙が混じったような匂いが

身体から消えないような気がするのは、どうやら自分だけではなかったらしい。

佐々木の表情から言いたい事を察したのか、王の唇の端に苦笑のかけらが滲んだ。

「お前もすごいぜ、シャンプーの匂い」

「悪い、何かで誤魔化さずにはいられないんだ」

しかし、友人のようにコロンなどつけた事がないので、

ホテル内のシヨップに売っていたシャンプーの中でも

一番匂いの強いモノを買ったのだが。

「謝るなよ」

いつものように王は、癖のある佐々木の長い髪をぐしゃぐしゃとかきまわす。

甘ったるい香りが一層強く部屋の中に広がった。

「それに俺さ、実はこういう日が来る事を心のどこかで待ち望んでいたんだ」

ひとしきり友人の髪を書きまわした後、王は語る。

酒精でほんのり朱に染まった頬に今度は自嘲的な笑みが浮かんでいた。

「馬鹿げた話さ、俺は自分が映画やドラマの主人公並の活躍が出来る」と

本気で信じていたんだからな」

「……」

「だけどいざ待ち望んでいた事態が起き、専門の患者を目の前にした時

俺は何をした？ほんの数分話を聞いて、睡眠薬や安定剤を処方するだけじゃないか。

場末のメンタルクリニックだってもっとまじな治療をやっているだろうよ」

たまっていた何かを吐き出すようにそう言うと、王は今度は自分の髪の中に

両手をつっ込んだ。

「そんなこと、俺だって夢想したことあるさ。それに患者の数が多すぎる

普段は十日で診る位の人数を一日で診ているんだ」

そう言ったところで少しも慰めにならない事を、佐々木も判っていた。

限界まで力を振り絞っても、手の中からは受け止めきれない

患者の苦しみが零れ落ちていき、

代わりに無力感が心中に重くたまっていく。

「俺なんかがここに来て良かったのか」

うちひしがれた表情で、王は佐々木ではなく虚空に向かって問いかける。

「もっと優秀な医師が派遣されるべきじゃなかったのか？」

「王、多分どんな経験豊富な医者が来ても、

ドラマや映画のような事にはならないよ」

半ば自分に言い聞かせるように佐々木は言った。

そう、現実はいつだってどんなバッドエンドの映画よりも残酷だ。

「今は自分を責める暇があったら、

患者の治療に全力を尽くそうぜ。せめてあとで後悔しないようにさ」

「……強いな、佐々木は」

「強くないよ。そうやって自分を誤魔化さないとやってられないんだ」

「お前と一緒に、よかった」

そう言ってようやく苦笑以外の笑みを見せた友人に、

佐々木も同じような表情を浮かべる。

一緒によかったのは自分も同じだ。一人だったら初日で根を上げていた。

多分院長はそれを見越して病院も人手が足りているとはいえないのに、

二人を一緒に派遣したのだろう。

その時、ＴＶからずつと聞こえていた笑い声が突然途切れた。

代わりに緊迫した声色のアナウンサーが、

電車爆破テロを実行した犯人グループの潜伏先を警察がつきとめ、包囲した事を告げる。

瞬時に画面が切り替わり、映し出されたのは

黒煙と炎を破れたガラス窓から吹き上げるごく普通の下町の集合住宅だ。

「犯人グループは建物内に立てこもり、警察の説得にも応じず発砲したために

銃撃戦となりました。恐らく大部分が射殺された模様です」

照明器具に照らされたアスファルトの上に、

何人もの人間が無造作に転がされている。

カメラが近寄っていくにつれ、それらが皆自分達と同じ年頃の女性たちだと判る。

穏やかな顔をしている者などひとりもない、

ある者は目をかっと見開き、ある者は口を絶叫の形にあげたまま

無念の形相でこと切れていた。

と、また別のカメラが燃えている家のベランダに飛び出した少女ら

しい人影を捉える。

テロに実行犯から連想される凶悪なイメージなど欠片も持たない、褐色の肌に中近東特有の大きな目をしたその少女は

「投降しろ」と大声で呼びかける警察に首を振り、笑みさえ浮かべながら銃をこめかみに当てて引き金を引いた。

軽い発砲音と共に、すでに人でなく

肉と血の塊となったモノがベランダから落下する。

「やめてくれ!!」

叫びながら王は乱暴にテレビのスイッチを切った。

「なんで皆そんなに簡単に死んでいくんだ」

静寂が戻った部屋の中で呻くように言った友人に、佐々木は今度こそかける言葉が見つからなかった

第五話

一つ大きく深呼吸をして、マイクはM病院の扉をくぐった。

同時に脳裏にテロの翌日の野戦病院のようなS教会内部の風景が蘇ったが

再び足を踏み入れた病院は、待合室が少々混み合っているものの無駄なモノが何一つない整然とした廊下を

医師や看護師がきびきびと歩いている、彼にとって見慣れた光景。

「二週間もたっているんだから、当たり前か」

独り言を呟いて、受付に向かう。

どんな大事件でも、時間がそれを過去の出来事にしてしまう。

爆破された地下鉄も先日復旧し、犯人グループの大部分は射殺された。

事件現場に置かれた献花台には、まだ花や蠟燭が絶えないが

街はクリスマスの飾りつけ始まった。

だがマイクをはじめとしてこの事件をまだ

「終わった事」にしてしまえない人々も無論、いる。

「すいません、アレックス君の病室はどこになりますか。ほらテロの被害者の」

ケネスの問いに、受付に座っていた女性が不審な表情だけを返す。

「失礼しました、私は鉄道警察の者です」

身分証を見せると、やっと彼女は自分の仕事を思い出したらしい

「失礼しました、五階になります」

ぎこちない笑みと共に改めて返された答えに、礼を言ってエレベーターに乗り込む。

多分あの態度はゴキブリよりもつこいマスコミに対応し続けた結果だ、と信じたい。

エレベーターの止まったフロアはしん、と静まり返っていた。

まだ朝も早いせいだろう。

「こんにちは、アレックス君だね」

半開きの個室のドアをノックしながら声をかけると、ベッドの上で小さな子供がびくりと身体をこわばらせた。

「ああ、怖がらないで。僕は警察の者だけど、君に聞きたいことがあつてきたんだ」

出来る限り優しい声色で話しかけても、青い瞳から怯えの色は消えてくれない。

なんだかいじめっ子にでもなつたような気分だが、爆破された車両に乗っていないながら

唯一腕の骨折だけで済んだ彼に、ぜひ聞いて確かめたい事があつた。

「少し地下鉄に乗っていた時の話を」

「誰ですか、貴方は」

女性のように甲高いが、鋭く厳しい声が背後からかけられたのはその時だ。

今度はマイクがびくりと身体をこわばらせて振り向くと、

そこに立っていたのは黒髪の小柄な青年だった。

両の眼もとから頬にかけて古いがかなり目立つ傷痕があり、それを隠すためのなのか

男にしては長い髪を赤を基調にした鮮やかな組み紐で一つに束ねていた。

「地下鉄警察の者だ。アレックス君に話を聞きに来た。君こそ誰だ」
高圧的にマイクは問い返した。

相手が判つてしまえば一瞬であれ驚いた事が恥ずかしく感じる。

大学生が暇にまかせてボランティアで話し相手でもつとめているのだろうか、

なんにせよ邪魔をされては困る。

「そんな話は聞いていません」

「君にいちいち許可を求めなきゃならん筋合いはない。

大事な話をしているから出ていってくれ」

その言葉にむつとしたように青年はくるりと踵を返して部屋を出

ていき

すぐに白衣を着てもどってきた。

「アレックス君の主治医の小児精神科医の佐々木です。」

繰り返しますが警察の方が来ると言う話は聞いていませんよ」

胸ポケットにつけられたＩＤカードを改めて見てマイクは驚く。

十代かと思ったら自分よりも年上だ。

「すいません。急いでいたので許可をとる暇がなかったんです。

直ぐに終わりますからいいですかね」

慌てて先ほどよりずっと丁寧な口調で言い返したが、

佐々木の厳しい表情は変わらない。

それに今度はマイクの方がむっとしたが、

主治医にへそを曲げられても厄介だ。

「判りました、アレックス君はまだ精神状態が不安定なので、

あまり事件の事を思い出させるような質問はしないでください」

しぶしぶといった様子で脇へどいた佐々木に、

ありがとうございますと作り笑いを浮かべる。

許可が出ればこっちのものだ。事件の事を聞かないでどうする。

「じゃあ、アレックス君。爆発した物の形を覚えている？」

「……綺麗だったよ」

しばらくの沈黙の後、布団に目を落としたままアレックスは答えた。

「どういう風に綺麗だったの？」

「ケーキ」

「え？」

「ママがお友達の誕生日にプレゼントって綺麗に包んでくれた、ケーキ」

マイクは頷いた。やっぱりだ。

「じゃあ、それは最初から電車にあったのかなあ」

また沈黙が落ちた。

「アレックス君、ケーキみたいな爆弾は最初から席に置いてあった

の」

「女の人……忘れていった」

少し強い調子で聞き返すと、相変わらずつつむいたままアレックスは答える。

「その人、この写真の人じゃないかなあ」

差し出した写真を、子供はちらりと見て首を振った。

「わかんない」

「よく思い出して、この人じゃなかった。もつと年をとっているかもしれないけど」

「わかんない、気がついたら電車が燃えていたんだよ。」

「話を聞いてなかったのですか、貴方は。もうやめてください」

泣き出した子供の前に身体を割り込ませた佐々木に、マイクは苛立ちを覚える。

「犯人逮捕のために必要な事だ、

この子は最初に爆破された車両に乗っていて助かった唯一の乗客で、話をする義務がある」

「だからと言って、あの日の事を無理やり思い出させるのですか」
非難がましいその口調に苛立ちが怒りに変わる。

自分達がどれほど捜査に苦労しているかも知らないで。

「当たり前だ、これ以上この街をテロの危険にさらしてたまるか」

「それとこれとは別問題です」

「医者風情がしつた風な口をきくな」

言葉が口から迸るのと、両腕が佐々木の襟元をつかむのとは同時だった。

「こっちは貴様より何十倍もの命を守っている」

「命に多数決を持ちこむな」

意外なほど強い力で、佐々木がマイクの腕を引き離しにかかる。ケネスが駆けつけてくれなかったら、多分殴り合いに発展していただろう。

「マイク、何をしている」

「佐々木、どうした」

自分をケネスが、佐々木を別の、

やはりアジア系らしい医者がかいじめにして引き離す。

「離してください、こいつを公務執行妨害で逮捕します」

「医師の忠告を聞かないで何が公務執行妨害だ」

声を荒げる双方に、ケネスが判ったと言う風に首を振った。

「マイク、ちょっと表で頭を冷やして来い。後は俺が引きつぐ」

「しかし」

「病院で騒ぎを起こしかけたんだ、早くしろ」

久しぶりに聞いた先輩の怒鳴り声が、マイクを廊下へと叩きだした。

続く

第六話

声に弾かれるように部屋を出る後輩を、ケネスはため息とともに見送った。

職務熱心なのは結構だが、それを他人にまで強要するマイクの悪い癖が久々に

出てしまったようだ。まあ、この二週間の不眠不休の捜査で自制心の壁が

大分もろくなってしまうていたのだろう。あとでもう一度いい聞かせておこう。

そう思いながら、ケネスは改めて黒い髪の小柄な医師に向かって、

「失礼しました。お怪我はありませんか」

と丁寧な謝罪した。

「いえ」

歪んでしまったネクタイと襟元を治しながら、医師は首を振る。

「しかしこれ以上の質問はやめて下さい。この子には負担が大きすぎる」

ケネスは頷いた。アレックスは泣きじゃくりながらも

ずっと医師の白衣の裾を握り締めている。

「随分となつかれているんですね、Dr……」

「佐々木です」

聞き慣れぬ姓を名乗りながら、佐々木医師は泣き続ける子供の肩を落ち着かせるように優しくたたいた。

「主治医になって日が浅い私にまで縋らずにはいられない。

それほどこの子は不安なのです」

いささか強い口調で佐々木はケネスに説明をする。

「なぜ、今頃になってアレックス君に事件の事を尋ねるんですか？

犯人達はもう……」

「先生、もしよろしければ少しお時間をいただきたいのですが」

怪訝な顔をした佐々木に、ケネスは続ける。

「お願いします。私達がここに来た理由、それは立ち話で説明できるものではないのです。それに」

とケネスはもう一度ベッドの上のアレックスを見る。

「あまりアレックス君に聞かせて良い話とも思えませんか」

佐々木医師はしばらく考えた後、

「判りました、二階にカフェテリアがあります。そこでいいですか」と頷いた。

「私はケネス・ハーヴィといいます。マイク……先生に掴みかかった彼とは

鉄道警察の先輩と後輩で、まあ、年の離れた相棒ですよ」

冬の柔らかな日射しが差すカフェテリア。コーヒーの乗った小さな机を挟んで

向かい合った後、ケネスは改めて自己紹介をした。

「佐々木兵衛、日本人で小児精神科専門医です」

同じように自己紹介を返しながら、佐々木はケネスが自分の顔や手に残る

酷い傷痕から目をそらさず、かといって

嫌悪や憐れみの表情も浮かべていない事に気づいた。

たったそれだけの事だが、先ほどのもめごとでささくれだった心が穏やかになる。

「日本人ですか。私も短期間ですが日本に住んでいた事があるので

沖縄、といいましたか、そこからベトナムに派遣されました。

ああ、これはその時の名残ですよ」

と言いながらケネスが掲げて見せた左手には引きつれたやけどの跡が広がっていた。

「ベトナム、戦争ですか」

「ええ、四十年以上前の事です。所で精神科の先生が主治医と言う事は」

アレックス君は」

「ええ」

佐々木は頷いた。

「テロが原因のPTSDを患っています。

身体の傷はもう入院の必要がないほど回復していますが

電車に関する音や映像に過敏に反応して酷いパニックを起こしてしまふ。

今適切な治療をしないと、彼は一生この記憶に苦しめられる事になるでしょう」

「そうですか、最初にそれを聞いておくべきでしたね、重ね重ね申し訳ない」

再び丁寧に謝罪を繰り返すケネスの姿に、佐々木は好感を抱いた。

「いえ、俺も最初にきちんと説明すべきでした。しかしどうして今ごろ

話を聞きに來たんですか？ 犯人たちは捕まったんでしょう」

「犯人の大部分は射殺されました。生存者はゼロで」

佐々木の言葉をケネスは微妙に訂正する。

「そして、つい先日ですが我が国が「悪の枢軸」と呼んだ国からイスラム系過激派組織『ハマス』が犯行声明と新たなテロ予告を出したのです」

「……射殺された人々の他に、国外逃亡に成功した犯人もいるのですか？」

「いえ」

ケネスは苦い顔で首を振った。

「射殺された人々は、ハマスの構成員ではありませんでした。

戦争が始まる以前からこの国に移住し、善良な市民生活を送っていた女性たちだったのです」

「……女性」

佐々木の脳裏に四日前に見たTVの映像が蘇る。

燃え上がる木造住宅、アスファルトの上に無造作に転がされた死体、そして投降するより死を選んだ少女。

「じゃあ、警察はまさか冤罪で彼女達を……」

「冤罪ではありませんよ」

もう一度ケネスは首を振った。

「彼女たちは確かにテロの犯人グループの一員でした。焼け落ちた家の中から」

多数の武器や、爆弾の材料の残骸が発見されましたから」

「しかしなぜ、善良な市民達が突然テロリストに変貌したのですか？」

「それが私達が今日ここに来た理由なのです」

ケネスは背広のポケットから一枚の大分くたびれた、古い写真を取り出して

テーブルの上に乗せた。

そこに写っているのは中近東の国には珍しい切れ長の瞳をした少女が写っていた。

まだ年端もいかない年齢だが、将来これは美人になりそうだと皆が太鼓判を押しそうな端正な顔立ちをしている。

「彼女はレイラ、と呼ばれています。ハマスの中心的メンバーで

爆弾製造のプロフェッショナル。今回の逮捕劇の中で唯一逃亡に成功した、

今回のテロの主犯です」

続く

第七話

佐々木はケネスの説明を聞きながら、写真を見つめた。

脳裏にテロ当日教会に次々と運び込まれる悲惨な姿に変わり果てた乗客たちの

姿が蘇る。あの地獄のような光景を作った人物が写真の中の少女だと言われても

はい、そうですかと素直に頷く事が出来ない。

爆弾制作のプロフェッショナル、凶悪なテロリスト。

そこから佐々木が想像するものはもっと荒んだ雰囲気、例えるなら故国にいたヤクザのような男性像だ。

多分こんな少女と街中ですれ違ったら自分は頬笑みさえ浮かべてしまっただろう。

「これは十年前以上前の写真ですから、今の彼女は立派に成人しているでしょう。」

……意外ですか？　こんな美しい女性が犯人と言われて」

内心を見透かされたようで、佐々木は気恥ずかしさを覚えながら頷いた。

「今回のテロは全てが予想外の出来事の連続だったのです」

「コーヒーを一口すすってケネスは続ける。

「最初に爆破されたのは、アレックス君達が乗っていた地下鉄の車両でした。

使用されたのはプラスチック爆弾、通称C-4です。推定重量三百グラムほどの

それでは車両は完全に破壊されることなく、炎上したまま走り続けた。

ニューヨークの地下鉄は駅と駅の間がかなり短い。炎の塊となった電車は

そのまま駅に突っ込み、そこに仕掛けられた液体状の爆弾を爆発さ

せ、

さらにそこで生じた爆風と炎は、煙突の役目を果たした地下トンネルを伝わった。

通風口の上にいた人や車を吹き飛ばしながら、さらに炎は第三の駅に同じように仕掛けられた爆弾も爆発させたのです」

「警戒が厳しい中、よくそれだけの爆発物を地下鉄の駅や

車両に持ち込みましたね。ペットボトルの飲料すら持ち込み禁止なのに」

ケネスの表情が苦さを増す。

「市内の地下鉄ですからね、

空港並みのセキュリティシステムを敷くことはできません。

それに、爆弾は我々が予想もしなかった物に偽装されていたのです」

「なんですか、それは」

「ミルクですよ。哺乳瓶に入った赤ん坊の食事だったのです」

「……ミルク、ではまさか犯人たちは」

そこから想像した事の余りのおぞましさに、佐々木は絶句した。

いくらテロリストでもそこまではしない、いや、して欲しくない。

「御想像の通りです、先生。テロリストたちはミルクに偽装した爆弾を持ち

赤ん坊を連れていました。子連れの母親を装って、駅に座っていたのです。

炎よって爆弾が誘爆するその瞬間まで」

淡々と紡がれる言葉に、佐々木は嘔吐感を覚えた。

「大丈夫ですか、先生」

微かなうめき声を上げて、両手で口を押さえた佐々木にケネスが写真のようにくたびれたハンカチを差し出してくれる。

「いえ、大丈夫です。失礼しました」

こみあげてくるものを無理やり飲み下して、佐々木は首を振った。

「なんて、酷い事を」

「本当です。このテロを計画した人間……恐らくレイラ……は

恐ろしく狡猾で冷酷です。二年も前にこの国に偽造パスポートで入国し

どういう手段を使ったかまでは不明ですが、秘かに善良な市民であった移民した同国の女性達をテロリストに仕立て上げた。

世界同時多発テロ以来、テロに対するセキュリティは飛躍的に厳しさを増しましたが、

それでも女性、しかも子連れならば殆ど疑われる事はない。彼女自身ケーキに偽装した爆弾を車内に持ち込んでいますからね」

佐々木は先ほど、アレックスがマイクに喋っていた内容を思い出す。

「では、アレックス君が目撃した女性が」

「レイラでしょう。乗車した駅のカメラには後ろ姿しか写っており下車した駅の下車した駅のカメラは爆風で吹っ飛んで映像は残っていませんが、

同一人物の作った爆弾には必ず同じ特徴がある。

彼女は故国で二度爆弾テロを起こしていますが、その時の爆弾もプレゼントのように美しくラッピングされていたそうです。我々はこの特徴と

ハマスの犯行声明から、今回のテロの主犯を彼女だと断定したのです」

「そうですか」

佐々木は頷いてもう一度写真の少女を見る。先ほどは可愛らしいと感じた

笑顔が妙に禍禍しく見えるのは、話を聞いた後の心境の変化からだろう。

「断定はしましたが、我々はまだ彼女を逮捕できないでいる。

射殺された女性達の身元は全て調べ上げましたが、その中にレイラはいなかった。

そして、あの国はアメリカが二度仕掛けた戦争のせいで国民一人一人の情報など

殆ど判らない。この写真が手に入っただけでも奇跡です」

とケネスはテーブルの上の写真を指差す。

「これで、我々が今日ここにきた理由がおわかりいただけたでしょうか、先生」

佐々木は頷いた。

「レイラの現在の姿の唯一の目撃者、それがアレックス君なのですね」

「はい、ハマスが新たな犯行予告を出した以上、猶予はありません。一刻も早くレイラを逮捕しなければ、また新たな犠牲者が出る。

テレビでも連日この写真を写し、情報提供を呼びかけていますが子供の頃の写真では限界がある」

とそこで一度言葉をきり、ケネスは佐々木をじっと見つめた。

「そこで先生にお願いがあります」

「俺に、何を？」

戸惑う佐々木に、ケネスは続ける。

「時間がかかっても……、と言いたい所ですが出来る限り早くアレックス君からあの日電車に爆弾を置いていった女性の特徴を

聞きだして下さいませんか。先生の方が我々より話を聞きだしやすいはずですから」

「確約は、できません」

少しの間を置いて、佐々木は答えた。

「俺は医師ですから、証言よりを得るより治療を優先させます」

「それは判っています。しかしPTSDはその原因を思い出す事も治療の一つではありませんでしたか」

佐々木は僅かに苦笑する。

「よく、判っていますね」

「PTSDが病として認識された戦争に参加していますからね。お願いします、今我々はすがる物ならば藁にでもすがりたい状態です。」

もう二度と、ニューヨークからテロの犠牲者を出したくない。

多分先生も同じ気持ちでしょう?」

ケネスが差し出したやけどの跡が残る手を、少し間を置いて同じように

酷い傷痕が残る手が、遠慮がちに握り締めた。

「判りました。アレックス君の負担にならぬ程度に全力を尽くします」

「ありがとうございます、では何か判りましたらこの番号に」

とケネスが携帯電話を取りだすと同時に、それが鳴りだした。

「もしもし、……わかった。すぐそちらに向かう」

短く会話を終え、ケネスは慌ただしく

机の上の紙ナプキンに九ケタの数字を書きうつした。

「呼び出しがありましたのでこれで失礼します。何か判りましたらいつでもかまいませんからここに電話をください」

そう言っただけで去っていく老刑事を佐々木は電話番号のかかれた

紙ナプキンを手にその後ろ姿が消えるまで、見送った。

続く

第八話

「ああ、この人なら確かにここで働いていましたよ。随分昔の写真みたいですが、この綺麗な切れ長の瞳はちつとも変っていない」
シスター兼所長はマイクが差し出した古い写真を見ながらニコニコと笑う。

豊満な身体を包む修道女の聖服、

その紺色のスカートの裾を幾つもの小さな手が握り締めていた。

「まだ若いのに赤ん坊や小さな子供の世話が本当に上手で

随分と助かっていただけで故郷の親御さんが倒れたとかで、急にやめてしまったのよ。残念ね」

「そうですか」

マイクはため息をつく代わりに、唇をかみしめた。

もう幾つ目になるのか、数えるのをとうに諦めた目撃情報の確認作業。

低所得者層が住人の大部分を占める下町の一角にある教会兼託児所で、

レイラが働いているという情報が寄せられた時は、

ガセネタもいい加減にしろと思ったが、それでも確認に出向かないわけにいかない。

無駄足だと思ったのに、まさか本当だったとは。

「それはいつの話ですか」

「そうね、三日前よ。ところで彼女、一体何をしたの？」

黙りこんでしまったマイクに代わって質問を続けたのはケネスだ。

「……何をしたらって、テレビを見ていないのですか？」

「あのテロ以来、どのチャンネルを回しても嫌な映像しか映らないし、

この仕事をしていると元々余り見る暇もなくて、
ここ十日程はスイッチにさわりもしてないわ。

でも、テレビのニュースになるような事を彼女はしでかしたの?」

「いえいえ、単にちよつとした交通事故の目撃者なんですよ」

思わず詰問口調になってしまったマイクの質問に、

すかさずケネスがフォローを入れる。

「そうなの、じゃあちよつと待っていてね。

彼女の住所と電話番号をメモしてくるから」

そう言つて、シスターが豊満な身体を揺らしながら別室に消えると、盾をなくした子供達がじつと二人の刑事を、いや、正確に言えばマイクを見上げた。

その表情にマイクは嫌な見覚えがあつた。

駅や電車をパトロールしている時に後ろ暗い所がある人間が自分達を

こつそりと見つめるソレによく似ている。

なぜ、こんな年端のいかない子供達がそんな表情をするのだろうか。マイクは落ち着きなくコートポケットの中で手を動かしながら、ケネスの表情をうかがうと、こちらはサンタクロースのような笑顔を浮かべて

子供達を見つめ返していた。

ふいに、子供の一人が堪え切れないように泣き出す。

「あらあら、ごめんなさいね」

メモ用紙手に小走りに戻ってきたシスターは

そのぼつちやりとした手で泣き出した子供の頭を優しく撫でる。

「こんな場所の託児所だから、皆警察官、特に白人の方には余りいい印象がないの。

自宅に踏み込まれて親を目の前で逮捕された子もいるし」

「そうですか、では怖いおじさん達は早々に退散する事にしましょう。

う。

ありがとうございました」
シスターからメモを受け取り、相変わらず笑顔のままで踵を返したケネスの後に

マイクも慌てて続こうとしたが、コートの裾を引っ張られて振り返った。

「どうしたんだい？おじょうちゃん」

精一杯優しい声で、コートの裾を掴んだままの褐色の肌に縮れた髪をおさげにした

少女に尋ねる。そういえば、この託児所にはシスターを含めて白人は一人もいない。

「お姉ちゃんを、捕まえちゃうの？」

おどおどとした小さい声の、それでも精いっぱい問いかけに

マイクは答える事が出来ず、曖昧な笑みを浮かべたまま少女の手の中から

コートの裾を引き抜くと、無数の同じ問いが込められているだろう視線を背中に感じながら教会を出た。

「おい、どうした。そんな顔をして」

ケネスに尋ねられたのは、託児所を兼ねた教会が完全に見えなくなった場所にある小さな空き地でだ。

さび付いた網のないバスケットゴールが二つ、落書きだらけの壁にはさまれて置かれている。

「いえ、あのその」

「テロリストが託児所で働いていた事がそんなに意外か？」

思っている事をズバリ言われて、マイクは小さくうなずいた。

「そんなに驚く事じゃない。テロリストだって人間、ましてレイラは女性だ。」

しかし、上手い場所を見つけたな。ここの住人たちにとって警察は厄介な存在でしかないし生きていくのに手いっぱい

他人を構う余裕がある奴も少ない。ああいう託児所は

常に人手不足だから、経歴など碌に確認もせずに雇ってもらえるしな」

「しかし、彼女は大部分の乗客が幼稚園児であつた地下鉄の車両に平然と爆弾を

仕掛けたんですよ。そんな悪魔みたいな人間が」

「子供達の世話をし、しかも慕われていたのか理解できない、か？」
もう一度頷いたマイクにケネスはほろ苦い表情を浮かべた。

「マナスが公開している情報によると、

彼女は1991年の湾岸戦争で家族を全て失い

2003年のイラク戦争で夫が戦死、

子供がアメリカ兵の誤射により撃ち殺されたそうだ」

何と答えていいか判らなくなり、ただ黙りこむマイクにケネスは続ける。

「もしかしたら、彼女を悪魔にしてしまったのは俺たちアメリカ人かもしれんな」

その言葉に、マイクはポケットの中から古びたレイラの写真を引っ張り出した。

中近東出身の人間にしては切れ長の瞳がその中からじっとマイクを睨みつけている。

教会を訪問するまで、マイクの中で彼女は血も涙もない極悪人に過ぎなかった。

ちょうどテレビの中に映し出される戦争が、本物だと言われながらどうしても

テレビゲームの画面にしか見えなかったように。

いや、世界貿易センタービルにジャンボジェットが突っ込んだ時でさえ

マイクは、いや大部分のこの国の人々はただテロリストの非道さに怒り、

復讐を誓っただけだった。

自国の軍隊が他国で「世界の平和」の名目で何をやってきたのか考へもしないで。

「何て顔をしているんだ」

ぽんと肩を叩かれて我に帰ると、

ケネスが刑事の表情でマイクの顔を覗き込んでいた。

「ここでいつまでも油を売っているわけにはいかん、この住所は多分偽物、いや、

仮に本物だったとしても、退職してから三日たっているから

いる確率はゼロに近いが一応行ってみよう」

「は、はい。でも」

「あんな、マイク」

ケネスは刑事の顔で言葉を続ける。

「世の中には、レイラよりも酷い経験をしながら、

それでもまっとうに暮らしている人間は五万といるんだ。

そして私たちの仕事はそんな人々を守ることだ」

「は、はい」

背筋に一本筋を通された気持ちでマイクは頷いた。

そうだ、自分は刑事なのだ。今やるべき事は百三十人の死者を出したテロの主犯の

迅速な逮捕。彼女の境遇を憐れむのはそれからでも遅くない。

と自分に言い聞かせて、マイクは歩き始めたケネスの後を追った。

「そう、刑事さんが先ほど。シスターありがとう」

丁寧な礼を言ってレイラは携帯を畳む。もう少し時間を稼げるかと思ったが

案外早く見つかったしまった。まあ、あの日以来いくら子供の頃の物とはいえ、

連日連夜TVで自分の顔写真が放送されれば、無理もない。

それとも、有色人種の低所得者ばかりがすむこの界限で働きもせずにアパートに籠り続けるのは流石に目立つと、

託児所で働き始めたのもよくなかったのだろう。

壁に張り付くようにして窓から外をうかがうが、まだそれらしい人影はどこにもない。

だが、ここに刑事達がやってくるのも時間の問題だ。

きゅっとレイラは荒れた手を握り締め、

そこに残る子供達の肌の感触を打ち消した。

視線を向けたテーブルの上には、出来たばかりのC-4と

インターネットに接続され、何かをダウンロード中の

画面が映し出されたノートパソコンがある。

新しいテロを実行するための二つの道具、

一つは完成したがもう一つはもう少し時間がかかりそうだ。

もう少しここに隠れていたかった、だが、もうぐずぐずしている時間はない。

「まだよ、まだ私は捕まるわけにはいかないの」

逃げ伸びて、道具を完成させて、予告道理テロを実行するまでは。

何のために？

「……無論、罪なく殺された故国の人々の無念と怒りと悲しみをこの国の奴らにも味あわせてやるためよ」

胸の奥からの無言の問いに、レイラは声に出して答えを返す

同じ胸の中のぽっかりと空いた漆黒の

虚ろな穴から吹きつける冷たい風を感じながら。

その為ならなんだってやってやる。

そう、既に自分は二年の歳月をかけてこの国に移住していた故国の女性達を

言葉巧みに集め、戦争で崩壊した祖国の町並みや、

無残な死体となった人々の映像を見せて

彼女たちの罪悪感とこの国への憎悪をあおり、

善良な市民達をテロリストに変貌させたのだから。

爆弾とパソコンをかばんの中に放り込むと、

レイラは鏡に向かい肩下までのストレートな黒髪をひっぱり、

何の抵抗もなくずるりと手の中に落ちたウィッグを蓋つきのゴミ箱

に放り込むと、
剃りあげた頭に金髪のショートカットのウィッグを被る。
さらにブルーカラーのコンタクトを入れれば、鏡に映ったのは
見知らぬ女性。短い神への祈りを呟くとレイラはかばんを担ぎあげ、
窓から非常階段へと身を躍らせた。

続く

第九話

ー どうやら、気持ちは切り変わったようだなー

助手席で念入りに銃の確認をするマイクの様子を見て、ケネスはそつと安堵のため息をついた。

レイラの経歴を話すのが早すぎたか、とここまで来る道すがらずっと危惧と後悔が入り混じった煮詰まったコーヒーのような想いを抱えていたのだが、どうやら杞憂だったようだ。

この国の人達は、いつそ愛おしいほど無邪気で想像力がない。

改めてポケットの中からレイラの写真を取り出して、ケネスは思う。もっともそれは自分も同じだった。青い空、

そしてそれをそのまま溶かしこんだような同じ色の海。

物悲しい弦楽器の音色とそれに合わせた歌声が、

いつもどこからか聞こえてくる

焼けつくような日差しの中の基地を出て、

息苦しいほどの緑生い茂った同じように熱さに不快な湿気が加わった戦いの最前線に出た瞬間まで。

俺たちは、世界の平和を守るために戦っている。俺たちに逆らう奴は悪だ。

だが、正義の使徒であるはずの自分達を迎えたのは、武装した百戦錬磨の戦士たちではなく

素朴な農民や、いたいけな幼い子供の格好をしたゲリラだった。

仲間以外の動くもの全てが敵に見えるようになるまで時間はかからなかった。

第二次世界大戦の時より格段に進歩したメディア技術により、戦場の映像は誤魔化されることなく故国に伝えられる。

国のために命をかけて戦ったのに、国に帰れば罵倒と非難の嵐とつかの間の休暇で戻ってきた沖縄の基地で聞かされた。

「あんた達は勘違いしちまったんだろうね」

その話を聞いた行きつけの飲み屋のママは、煙草を口に咥えたままで苦笑していた。

「家を焼き払い、女子供を無差別に殺してさぞや恨まれると思ったらもう手を挙げて歓迎され、がちがちの軍国主義だったこの国はあっという間に

民主主義に塗り変わっちまった。でもね、こんな国のほうが特殊なのさ。

誰だって何もしてないのに、家を壊され、親しい人を殺されれば怒るもんだよ」

ヒサヨといったそのママが、

太平洋戦争で家族を全て失っていたと知ったのは何時だったか。ジャングルの中の戦闘で全身に大やけどを負って戦線を離脱し、長い入院生活の後再び店を訪れた時、そこはシャッターが固く閉ざされ

「ククル」と書かれた店の看板の跡だけが残っていた。

故国に帰る寸前に、基地をぐるりと囲んだ平和活動家たちの「人間の鎖」の中に

彼女とよく似た顔をした人を見たような気がしたが、

それが彼女かどうかは判らなかった。

ただ、飛行機の中で戦友たちがどこかの飲み屋の子供を誤ってひき殺してしまったと

笑い話をしていたのを、胸が悪くなる思いで聞いていた記憶だけは今でも鮮明に思い出せる。

「まだ、中にいますかね」

マイクの声がケネスを現実に戻す。

「判らん。だが相手は爆弾製造のスペシャリストだ。

なにかを仕掛けてあるかもしれん。用心するに越したことはない」

「ですね、応援は？」

「もう呼んだ。あと三〇分もすれば駆けつけてくるだろう。もうしばらくの辛抱だ」

頷いてマイクは肩からつりさげたホルスターの中に銃を仕舞った。

「何をするんですか？」

「ゲンかつぎだ」

ポケットから取り出した皺くちやのードル札にケネスは自宅の住所と電話番号をかきつける。

「誰が始めたか知らないけどね、いつの間にかこんなに溜まっちゃった。」

まあ、金を預けておけば何としても取りに帰りたいと思うんだろうね」

やはり煙草を啜えたまま苦笑するヒサヨと、戦場へ行く前の兵士たちが残した

壁一面を覆い尽くす住所氏名が書かれたードル札がケネスの脳裏に鮮やかに蘇った。

「沖縄の基地にいた時、行きつけのバーのママに教わったんだ。こうしておけば無事に生きて帰れるってな」

「へえ、俺もやりますよ」

二枚のードル札がパトカーの日よけに挟まった時、

レイラがいるらしい部屋の中から大きな音が聞こえた。

「マイク」

「はい」

声に弾かれるようにマイクがパトカーの外に飛び出す。

銃を構え壁を背にして階段を一步づつ昇る。

ケネスはそのすぐ後に続いた。

ドアにかぎは掛かっていない。

「動くな、警察だ」

叫び声と共に開かれたドアの向こう、狭い室内の中には見渡した限り誰もいなかった。

残されていたのは板張りの床に直接ひかれたマットレスと台所のシンクの中に無造作に突っ込まれた化学薬品。

「彼女はまたここでC-4を作っていたのか」

「まだ、浴室の壁に水滴がついていて、シャワーを使った形跡が残っています。レイラは少なくとも朝まではここにいましたね」

部屋を一通り見て悔しそうにそう言ったマイクにケネスは頷いた。

「多分、ここから逃げたんだろ。応援を待たずに踏み込んでいたらもしかしたら捕まえられたかもしれない」

開けっばなしの窓のすぐ下には非常階段がある。

「ちくしょう」

マイクがいらだち紛れにマットレスを蹴り飛ばす。

と、ずれたその下から数枚の写真が出てきた。

ケネス達が持っているのと同じ位古びているそれに写っているのは中年の男女、そして若い男性と子供。

恐らく、レイラの失った家族達。

「ーあんたも、辛い思いをしたんだろうなー」

それを拾いあげながらケネスはそっと胸中で呟く。

「ーだがな、あんたのたった行動は最悪だ。」

テロを実行した時点で、あんたは他国に攻め入った俺達と同じレベルに堕ちたんだー

遠くから微かに応援に駆け付けてきたパトカーのサイレンの音が聞こえた。

続く

第十話

「悪い、君まで巻き込んだ」

「気にするな、お陰で半日休みが取れた」

ロッカールームで白衣を脱ぎながら、

王はうつむいて謝る佐々木に笑いかけた。

刑事と病室で口論になり、尚且つ掴みあいになくなってしまった原因を

「連日の勤務で疲労がたまっている」事にされ、

「半日しかないけれど、今日は休みにしてくれ」

と初日からずつと部外者である二人の勤務を管理してくれているアスラン医師から言われたのは、数分前の事。

「それよりも顔色が悪いぞ。熱でもあるのか」

「いや、ちよつと胸が悪くなる話をさっきの刑事さんから聞いたからだ」

「そうか、じゃあホテルで聞かせろよ」

「でも」

「酷い話を一人で抱え込むと身体に悪いぞ。吐き出しちまえよ」

「……ありがとう」

親友の言葉によつやく佐々木の口元に笑みに似た物が浮かんた。

病院を出ると、町はすっかりクリスマス一色に飾り立てられていた。

それは先日起きた悲惨なテロを

早く過去の出来事にしてしまいたいという人々の心の現れのようにだ。

「コーヒー飲むだろ。買っていくから先に部屋にいったいてくれ」

ホテル近くの移動式コーヒースタンドの前で足を止めた王に、佐々木は頷いた。

泊まっているホテルよりも、ここのコーヒーの方がよほど美味しくて安い。

エレベーターの扉が閉まり一人だけになったとたん、座りこんでしまいたいほどの疲れが押し寄せてくる。

ミナ、どうしているかな。

ふいにカリフォルニアの恋人の事が思い出されて、口元に苦笑が浮かんだ。

ニューヨークに着いた日以来、電話もメールもしていない薄情っぷりなのに、

今、無性に彼女の声が聞きたかった。

多分怒って拗ねて大変な事になるだろうが、

王が戻ってくる前に久しぶりに電話を試みよう。

エレベーターが止まった。扉が開く。

「兵衛」

「ミナ」

駆け寄ってきた恋人を佐々木は信じられない思いで見つめた。

「どうして、ここに」

その問いに、ミナは美しい顔の中でも特に印象的な

アーモンド形の瞳で佐々木を軽く睨みつけた。

「大変な事になっているのは判ったけれど、

メール一本くれない薄情な恋人に一言文句が言いたくて

クリスマスと年末年始の休暇を全部返上して、無理やり休暇を取っ

たのよ」

「……ごめん」

「空港から病院に電話をしたら、半日休暇だって教えられたの。ついでにホテルもね」

そう言いながら、ミナは一転泣きそうな顔になる。

「すぐく、心配したんだから。テレビじゃ酷い映像ばかり写すし、被害者の殆どは子供だと聞くし……ちよつと、兵衛！」

ミナが戸惑いの声を上げてても、佐々木は彼女を抱きしめた腕の力を緩めようとしなかった。

「ごめん、しばらくこのままで」

厚いコート越しとはいえ恋人の柔らかく暖かい身体を全身で感じながら、

佐々木は切れ切れに哀願する。

今まで胸の底に押し込め、感じない振りをしてきた感情が、堰を切ったようにあふれ出た。

瞼の裏に蘇る、あの日の光景。弱弱しく泣き声を上げながら、血まみれで搬送されてくる子供達。

黒色のトリアージタグを付けられた我が子を見つけて泣き崩れる母親、

そして、酷い傷痕の残る子供のような小さい手を握り締めて、力尽きた老人。

「……俺は、救えなかった。医者なのに……大ぜいを見殺しにした」「そんなことない」

優しい声が耳元で囁かれ、柔らかい掌が何度も頭を撫でる。

「兵衛はきつと全力を尽くした」

その言葉に、佐々木の眦から涙がこぼれおち、ミナを抱きしめる腕に一層の力が籠った。

「あの、お二人さん」

ようやく佐々木がミナを解放したのは、

呆れたような王の声が背後から聞こえた時だ。

「久々の再開で嬉しいのはよく判るが、そういう事は部屋でやった方がいいと思うぜ」

「あ……えっと、その、ごめん」

耳の先まで真っ赤になって謝る佐々木に、

王は苦笑して両手に持っていたコーヒーの紙コップを押し付ける。

「邪魔者は退散するよ、じゃ、ミナ、

悪いけどこいつの話をじっくり聞いて慰めてやってよ」

「ちよ、王」

うるたえる佐々木とミナに後ろを向いたまま手を振ると、

王はさっさと今降りたばかりのエレベーターに戻ってしまった。

「あ、あの、ごめん、こんな場所で。ちょっと色々あって、だから、俺」

「とりあえず、部屋に入れてくれる？」

しどろもどろに言い訳をする佐々木をミナの言葉が遮る。

「さっきは嬉しかった……、ずっとメールも電話もなくて、忘れられてると思っていたのよ」

部屋に入るなり今度は自分から抱きついてきたミナの唇に、佐々木は思い切り強く自分のそれを重ねた。

下町の、ゴミが散乱する細い路地を足早に歩くレイラの耳にパトカーのサイレンの音が聞こえた。

道端に座り込んでいた、眠つきの悪い若者たちが足早に姿を消していく。

思った以上に警官たちの動きが早い、とレイラは舌打ちをした。

一刻も早く安全な場所に逃げなければ。

手荷物検査と称してかばんを開けられれば一巻の終わりだ。

金髪の鬘と青色のコンタクトで別人になりきっている自信はあったが、

それでもこんな場所に女性が一人、しかも大荷物をもって歩いていると目立つ。

流石に焦りを覚えて周囲を見渡すと、

こちらに向かつて歩いてくる場違いに身なりのいい男が見えた。

黒人でも白人でもない、アジア系の顔立ち。

片手にガイドブックらしい物を丸めて持ち、

辺りを見回しながら歩を進めているところを見ると、

地理に不慣れな観光客だろうか。チャンス、かもしれない。

レイラは一度わき道に入り靴を脱ぐと、

男の前にさも全力で走ってきたかのように飛び出して、

そのまま恋人にするように胸の中に飛び込んだ。そのまま数秒、二人の脇を、やかましい足音が通り抜けていく。ちらりと見れば制服を着た警察官だ。

真昼間から道端で抱き合っている不埒な男女に忌々しげな視線を向けるが、

それだけだ。

「……どうしたの？」

かけられた困惑した声に精一杯怯えた表情を作って顔を上げると、男らしい端正な顔が声と同じ表情をして見下ろしていた。

「すいません、柄の悪い男達に絡まれて。」

少しの間でいいからツレのふりをしてください」

そう言ってもう一度男の胸に顔をうずめる。

ややあつて男の腕が背中にもわされる感触を得て、レイラはニヤリと笑った。

突然細い路地から目の前に飛び出してきて、そのまま自分に抱きついた女性を

王は一瞬自分の荒れ狂う心が見せた白昼夢かと思った。

エレベーターの扉が開いたとたん、

目に飛び込んできた固く抱き合う親友と血のつながらない従姉妹の姿。

ミナがここにいる事の驚きと、微かな喜び、

そして焼けつくような佐々木への嫉妬。

荒れ狂う感情の嵐を理性を総動員して押さえこみ、

二人に軽口を叩いて再びエレベーターに

早足で乗り込む。扉が閉まるまでの時間が恐ろしく長く感じられた。早く、早く閉まれよ。俺が佐々木を押しつけてミナに抱きついてしまわないうちに。

千々に乱れる心に蹴飛ばされるように、
足早にホテルを出て当てもなく通りを歩く。
ようやく足が止まったのは、

無料の風俗店案内が突き刺さっているスタンドの前だった。
断ち切ったと思っていたのに、しつこく頭をもたげ続ける
従姉妹への恋心とそれを一時の肉欲で宥めようとする浅ましさ。

その両方に乾いた笑みを向けながら、それでも
大きな胸を腕でかくしただけの美女が、悩ましげに腰をくねらせて
いる

表紙のガイドを抜き取る。

今は誰でもいい、とにかく暖かく柔らかい体を抱きしめて
刹那的な快樂におぼれ、全てを忘れてしまい。
そして裏表紙の地図を頼りに再び歩きはじめ、
治安の悪そうな下町に足を踏み入れた時、
軽い衝撃と共に彼女が抱きついてきたのだ。

瞬きをし、深呼吸をしてもその姿は消える事はなく、
コート越しに伝わってくる女性の体温と鼓動に無意識に喉が鳴った。
すぐ脇を通り抜けて行った数人の警官の視線にようやく我に帰って
「どうしたの？」

と問いかける。

「すいません、柄の悪い男達にからまれて」
怯えた表情で理由を説明する女性。その切れ長の青い瞳の美しさに
どきりとした。

褐色の肌に金色の髪。珍しい組み合わせだが、
人種のもつこの国では皆無ではない。

「少しの間でいいのでツレの振りをしてください」
再び顔を胸に押し付けられ、戸惑いながらその背に手を回す。
そのまましばらく時間が過ぎた。

「誰も追ってこないよ」

「よかった。突然すいません」

恥ずかしげに三度うつむく女性に王は笑みを向けた。

「いや、少し驚いただけだから気にしないで。」

よかったらこのままこの地区を出るまで一緒に行こうか」

「あ、ありがとうございます。あの、私エミリーと言います」

「王月陰。その荷物持つよ」

と彼女のかばんに手を伸ばし、その足が何も履いていない事に気づいた。

「パンプスだと走りにくくて」

小さな声で理由を告げるエミリーを、カバンごと王は抱きあげた。

「あ、あの」

うつたえる彼女に

「何が落ちているか判らないだろう、このまま靴屋までいこう」と言つて王は歩きだした。

第十一話

ごめん、久代小母さん。色々あつてずっと携帯電話の電源を切っていたんだ。

うん、俺は大丈夫だよ。ちゃんと食べているから。じゃあ、また電話する」

バスタオルを体に巻きつけただけの姿でミナがバスルームから出てきたのを見て

佐々木はベッドの上で電話を切った。

「日本の小母さん？」

「うん、日本でテロの様子が報道された時に、

どうも俺が映り込んでいたみたいで……寒くない？そんな恰好で」

「大丈夫。その映像、カリフォルニアでも流れたわよ。教会の中だったかしら、

酷く怖い顔でレポーターに日本語で何か叫んでいたわね」

「そうだったかな、覚えてない」

あの時はとにかく目の前の被害者を治療する事で手一杯で、その他の事に気を配る余裕など全くなかった。

「でしようね。無理もないわ、あんな酷いテロだったんだもの。そうだ

日本からあなた宛てに、病院のメールボックスに届いていたEメールとそれに添付していた書類。

印刷をしてきたわ。ツボウチホスピタルからよ、知っている？」

とミナはスーツケースからバインダーを取りだす。

「うん、俺がインターンの時に研修をしていた病院だよ。

ああ、片先生からだ」

すぐ隣に腰を下ろしたミナの首筋や鎖骨の辺りに、

先ほどまでの行為の名残を見つけて

佐々木は気恥ずかしさを覚えながら、バインダーを開いた。

『佐々木、お前カリフォルニアにいるんじゃないかったのか？それともへまをやって

病院を追い出されてニューヨークまで流れてきたのか？まあ、事情はどうあれ

TVを見ていて驚いたよ、精神科医のお前があんな場所にいたんだから。ちらりとしか

写らなかったが、外傷外科の手技は衰えていないな。

きつと指導医の教育が素晴らしかったんだ、

と冗談はさておき、H大震災時の小児のPTSD治療の方法と
その後の経過をまとめた資料を送る。何かの役に立てば幸いだ。

佐々木、いくら優秀な医者でも出来ることには限りがある、

余り自分を追い詰めるな。そして、何でもいいから食べられるモノを食べておけ。

片丈一郎』

口が悪すぎると評判だった指導医の言葉そのままの文面に、佐々木は苦笑しつつも

胸の奥が熱くなる。真つ暗な長いトンネルをとぼとぼと歩き続け、
ようやく出口の明かりが見えた時こんな気持ちになるのかもしれない。

「何て書いてあるの？」

「何でもいいから食べろってさ」

「貴方の食の細さは有名なのね」

ミナの白くたおやかな手が、そつと佐々木の頬をなでる。

「今も碌に食べてないでしょ。大分痩せたわよ、顔色も悪いし」

「ごめん、食欲も食べる暇もなくて。ミナはその、少しふっくらした？」

その言葉にミナは顔を赤くして、両手で自分の肩を抱きしめた。

「貴方のせいよ。ちつとも連絡をくれないから、イライラして……

一番手っ取り早いストレス解消法に奔ったのよ。三キロ、春まで
院長のドーナツから逃げ回らなきゃ」

「ごめんよ」

今度は佐々木がミナの頬を優しく撫でる。

「実は、怖かったんだ。君の声を聞いたら、

全部を放り出して空港に行つてしまいたいような気がして」

「そうだったの、来て良かったわ」

「ああ」

頷いて佐々木は恋人に口づけをする。

「夢なら、……覚めないで欲しい」

「夢じゃないわ。私は確かに今、貴方の隣にいるのよ」

少しふくよかさを増した身体が佐々木を抱きしめ、口づけを続けながら

二人はベッドに倒れ込んだ。

本当にこの国の男は単純だ。

化粧室の鏡に、長い時間をかけて練習した

男の保護欲をかき立てる甘い笑みを浮かべた自分を映しながらレイラは思う。

悲鳴を上げて抱きつく。ただそれだけの事をしただけなのに、どうして初対面の自分の言動を全て信じてしまうのだろう。

さすが、映像技術だけは素晴らしい薄っぺらい勧善懲悪の映画を量産する国だ。

今、扉の向こうにいる王陰月と名乗った男の顔を、

何処かで見た事があると思っていたらテロの被害者の治療のためにカリフォルニアの病院から派遣された精神科医だと説明されて、

合点がいった。そうだ、テロの翌日、治療を受ける被害者達の様子を伝えたニュースに彼が映っていたのだ。

あれを見て、私は次のテロの目標を決めた。

故国では皆この百分の一の治療も受けられずに、死んでいったのだ。改めて心に湧き上がるこの国への憎しみを、

甘い笑みの裏側に押し込めてニユースの事を話すと

王は

「患者の治療が忙しくて、テレビなんかつける暇もなかった」と答えた。それは益々好都合だ。

ならば、自分の昔の写真もきつと見てはいないだろう。

底抜けに優しくて単純な王医師は、本当にレイラを抱いて靴屋まで歩いてくれた。

さらに靴だけでなく、その格好じゃ寒いだろうと暖かな冬服一式まで買ってくれた上に

君さえよければつきあって、と席の全てが個室になっている高級なチャイニーズレストランに案内された。

ホテルの部屋に連れ込まれるかと思っていたのに、

女性の扱いに手慣れている割には以外と身持ちが固い男らしい。

その事にレイラはほっと胸をなでおろした。

復讐を誓いハマスに入ってから、男を誘い、身を任せ、

油断と信頼を勝ち取った事も一度や二度ではない。

だが、それに嫌悪感を感じないと言えば嘘になる

故国では、こんな風に夫以外に笑いかけることすらも

不貞と教えられていたのだから。

貴方が紳士でよかったわ、王先生。

胸中で礼をいい、今まで食べたことのない美味な料理を口に運びながら、

レイラはそのお返しに二年前、この国に密入国した時から

丹念に作り上げてきた「エミリー」の人生を遠慮がちに語った。

父はこの国が「悪の枢軸」と名指しした独裁政権国家の出身だが、

母はこの国の人間だということ、

一九九三年と二〇〇三年、戦争が繰り返される度に周囲の目が厳しくなり、

差別されるようになった事。

「それでも、父と母と三人で肩を寄せ合って暮らしていたんですが、
昨年のハリケーンの水害で二人共亡くなりました」

と声を詰まらせると、王は痛ましげな表情で大変だったね。と呟くように言った。

どうやら微塵も疑っていないらしい。それを確信してレイラはさらに語る。

「政府から弔問金がでたので、思い切って
故郷を出てシカゴの演劇学校に入ったんです。

俳優になるのが昔からの夢だったから」

「じゃあ、どうしてニューヨークに？」

「学校がクリスマス休暇に入ったので、

ブロードウェイのミュージカルを勉強のために見に来たんです

でも、テロのせいでミュージカルどころか帰らなくなってしまうって」

テロから二週間たつても、まだニューヨークの空港は

旅行者に厳しい使用制限をしいたままだ。

「そう」

相変わらず同じ表情で深くうなずいた王に、レイラは心の中で高らかに嘲笑した。

精神科医だと言うが、この程度の嘘を見抜けないのなら藪医者だろう。

だが、この医者には使える。もっと同情を得ようと再度口を開きかけた時

「俺に何かできる事はないかな」

王はレイラが引き出したかった言葉をあっさりと口にした。

人を信じて疑う事のないその善良さに憐れみすら覚えながら、レイラは遠慮がちに

病院でボランティアを募集してないかと尋ねた。

「ボランティア？」

「ええ、あのテロで沢山の子供達が怪我をして入院していると聞い

ています

その子たちを慰めてあげたくて。一日中友達のアパートにいるのも窮屈だし

半分とはいえ、私もテロリストと同じ民族の血が流れています。何が償いがしたくて」

「君が責任を感じる事でもないのに」

そう言う王に、レイラは遠慮がちにお願いしますと何度も言葉を重ねた。

ついに彼が首を縦に振るまで。

「お礼を言っわ。優しくて単純で愚かな王先生」

今度は口に出して呟くと、鏡の中の自分にどうしようもない嫌悪感が湧いた。

大いなる目的があるとはいえ、自分は何時の間にこんな娼婦のような笑みを自然に

浮かべられるようになってしまったのだろう。天国の夫が見たらさぞかし嘆くだろうに。

自分への嫌悪感はずぐにこの国への憎しみに変わる。

まだ足りない、もっと、もっと命を奪い取れ。心の中に空いた虚ろな穴から囁く声に

レイラは大きくうなずいた。あたりまえだ。

私達の怒りと悲しみはこんな程度では癒されはしない。

火のような負の感情を笑顔の裏に閉じ込めて、

エミリーとなったレイラは化粧室を出て、王が待つ個室へと戻った。

第十二話

生温かい風が黒雲を運び、先ほどまで痛いほどに照りつけていた太陽を覆い隠す。

そして一瞬の間を置いて降る、というより叩きつけるような勢いで雨が降り出した。

雨具など何の役にも立たない。生温かい水はあつというまに全身を濡らし、

不快感を募らせる。

――後、どの位戦鬪を繰り返せば帰れるのだろうか――
火のついていないしめった煙草を啜えて、ケネスは思う。

「休暇まで、後少しだよな」

その心を読んだかのように、隣に立つ同僚が
雨水でぬれた顔に笑みを浮かべながら言った。

「ああ」

ケネスは頷く。休暇、か。湿気と暑さと死の恐怖が充満する地獄から、

青い海と空、そして辺りを警戒することなく自由に歩き回れる天国への帰還。

ほんの一時の事でしかないがそれが出来るだけ、
まだ自分たちはこの国の人たちよりましなのだ。

「私に言わせりゃあ、あんた達の国の大統領は大馬鹿ものさ」

戦場の恐怖を忘れようと、夜な夜な酒場に繰り出して狂ったように馬鹿騒ぎをする

兵士たちに、「ククル」という名の酒場の女主人はよく愚痴をこぼしていた。

「いくら力で抑えつけたってどうにもならないモノが世の中にある
ってことを」

ちつとも認めりやしないんだから」

天国である青い空と海に囲まれた南の島が、かつて自分たちの国の兵士によって

焦土と化したと、ケネスが知ったのはこの店に通い始めてからのこと。

「まあ、そんな馬鹿ものが作り出す戦争の

おこぼれで生活しているヒサヨさんも、同じ穴のむじなだけどさ」

最後は必ず同じセリフで愚痴を締めくくって、ヒサヨという名の女主人は

兵士たちの目の前にありとあらゆる強い酒を混ぜた、オリジナルカクテルを置く。

ああ、俺たちは馬鹿ものだ。

腕の中の冷たく重い銃を、雨にけぶるジャングルに向け、ケネスは記憶の中の

ヒサヨに語りかける。

大西洋を越えて、泥まみれになりながらジャングルの中で戦っている。

誰が敵かも、もう曖昧だ。

ふいに、目の前の草むらががさりと不自然に揺れた。

ケネスと同僚の銃が同時にそこに向けられる。

「誰だ、出てこい」

怒鳴り声に引きずられるように、草むらの中からそろそろと顔を出したのは

まだ年端もいかない少女。

恐怖に目を見開いて、凍りついたように固まったままこちらを見つめている。

その様子から、ゲリラではなさそうだと判断したケネスが行け、と手を振ろうとした瞬間、同僚の銃が火を噴いた。

少女の小さな体が血しぶきを上げて空中に舞い上がり、泥の中に倒れ伏す。

「何をしている」

「近づいたこいつが悪いんだ。ゲリラかもしれない」

叫び返した同僚の表情は、少女と同じように恐怖で凍りついていた。

「ばかな、まだ子供だぞ」

「判るもんか!」

この国の兵士たちは、どんな姿をしているか判らない。

どこから襲いかかってくるかも判らない。

だから、味方以外は全て殺す。

だが、それは……。

もう一度草むらが揺れた。

泥まみれで倒れた少女の隣に、もう少し年かさの女性がかけよって叫び声を上げる。姉妹、だろうか。

ピクリとも動かない小さな体を抱き上げて、憎悪と怒りに歪んだ顔でこちらを睨みつける。

ああ、そんな顔をしないでくれ。

彼女にも銃を突き付けながら、ケネスは思う。

俺たちは君たちの国に平和をもたらすために来たんだ。

正義の……ために……戦っているんだ。

軽い衝撃を感じてケネスは我に帰った。

目の前のパソコン画面がスクリーンセーバーに切り替わっている。

腕時計を見ると、日付が変わる時刻だった。どうやらとうとうしていらしい。

あの戦争の夢を見るのは久しぶりだ、とケネスは苦笑して頭を振り、眠気を追いだした。

少し離れたディスクでは、マイクが黙々と偽造IDの使用記録を調べている。

レイラがこの国に二年近く滞在している事を考えて、偽造IDを所持している可能性が高いが、

膨大な記録を一つ一つ照らし合わせていく地味だが根気のいる作業は、

この年になると辛い。

「もう、帰ったらどうですか。日付が変わりそうですし、疲れているでしょう」

「いや、もう少し頑張るさ。眠気覚ましにコーヒーを買ってくる」
ついに俺もマイクに気を使わせるようになってしまったかと、もう一度苦笑をして

部屋をでる。たちまち体を包み込む冷気が一気に寝ぼけた頭をしゃんとさせた。

警察署とコンビニは太い幹線道路で隔てられている。

信号待ちをしていると、足元に丸まった新聞紙が絡みついてきた。拾い上げると

「放火犯逮捕」の文字が目飛び込んでくる。

考えてみれば、この国も世界中で放火をしているようなものだ。

誰が望んでいるのかは判らない。だが、それを「正義」として行っているのだから

始末が悪い。気付くべきだったのだ。世界貿易センタービルにジャンボジェット機が

突っ込んだ時に。この国にどれだけの憎悪が向けられているかという事を。

だが、この国の人々が選んだ指導者が下した決断は「戦争」

そして、又新しい憎しみが形となってこの国に向けられた。

何処まで続くのだろう、この負の連鎖は。

信号が青になる。重い足取りで歩き始めたケネスの視界のはじを見覚えのある顔が横切って行った。

あれは、アレックス君の話を書きに行った時、
佐々木先生と同じ病室にいた医師ではないか。

一瞬声をかけようかと思ったが、その脇に立つ金髪の女性の姿を見て思いとどまる。

プライベートで刑事に声をかけられても迷惑なだけだろう。

遠目にも親しげに会話をしながら遠ざかって行く二人を見送りなが

ら、

ケネスは思う。これ以上この国の若者たちに他国の人を憎ませてはならない。

憎しみの連鎖はどこかで、だれかが断ち切らねばならない。

それが出来る立場にまだ自分はある。定年まであと半月もないが全力を尽くしてみよう。と。

続く

第十三話

「ミナ、少し太ったか？」

「目ざといな。三キロ、だそうだ。」

俺がメール一本よこさないから、一番手っ取り早い

ストレス解消法に奔った結果だと散々愚痴られた」

「そりゃ、不実な恋人の責任だ。勤務が終わったらきちんとエクササイズの

手助けをしてやるんだぜ、ベッドの中で。そうすればすぐに元に戻る」

「……まだ昼間だぞ！！」

顔を赤くしてそっぽを向く佐々木に、王はにやりと笑いながら言を継ぐ。

「恋人と一緒に勤務できる果報者を羨んだ皮肉の一つも受け流せないのかね、佐々木君」

「阿呆が、所で君が連れてきた女性は何者だ」

「エミリーだよ。シカゴの演劇学校の学生でテロのとばっちりを受けた。」

かわいい子だろ、浮気するなよ」

「君じゃあるまいし」

呆れたようにため息をついた佐々木の視線の先には、ノートパソコンの画面を見せながら子供達に語りかけるブロンドをショートカットにした女性の姿があった。

彼女の前にはフェルト地でできたマットの上に思い思いの格好で座る、

手や足、そして頭に包帯を巻いた子供達がいる。

「さあ、動物さん達は電車に乗ってどこに行くんだろう」

エミリーがパソコンのエンターキーを押すと、

画面が切り替わり動物達が乗り込んだ電車がゆっくりと走る映像が現れる。

それを見た子供達が一瞬身体をこわばらせるも、すぐに

「シマウマさんもいるね、象さんも。ああ、キリンさんは首が長くて窮屈そうだね」

彼女の感情のこもった巧みな話し方と、カラフルで楽しげな映像に笑顔を取り戻し

画面にくぎ付けになる。

佐々木と王が半日の休暇を取って二日後、M病院に新しい顔ぶれが二人加わった。

「どうせ行くのなら、ぶらぶら遊んでいるよりいいと思ったの」

と言った小児内科医のミナは、事前に病院間で連絡が取れていたので問題はなかったが、

「テロで足止めを食らっている演劇学校の学生ね……、しかも半分とはいえイラク人か」

いくらボランティアが盛んなこの国とはいえ、

飛び込みのエミリーにM病院側は最初かなりの難色を示した。

それを押し切ったのは、王医師の強い要請とエミリーの身元の確かさだった。

病院側の提示要請に、彼女は堂々とIDと学校の学生証を提示したのだ。

念のため調べてみてもIDは本物だし、学校はきちんと存在した。

「上手い方法だな。ああやってお話の中に電車を登場させて、それに対する恐怖感を

薄れさせていくのか」

エミリーが語る話の内容に

しばらく耳を傾けていた佐々木が感心したように言った。

「君の指示か？」

「半々だな」

同じようにエミリーに視線を向けながら、王は答える。

「俺は入院している子供達があの特口のせいで電車を酷く怖がっている事と

その恐怖を克服する方法を教えた。パソコンを使った朗読劇は彼女のアイデアだよ」

「ふうん、役者よりカウンセラーの方が向いているのかもな」

「やあ、佐々木先生に王先生。どうですか子供達の様子は」

そこに笑顔でやってきたのはアスラン医師だ。

「中々いいようです。新しく入ったボランティアスタッフがいい仕事を

してくれていますから」

と王が指差した先をアスランもしばらく見つめた後、そうみたいだね。と

納得したように言った。

「わがママを聞いていただいて感謝します。アスラン先生」

「いいや、患者さん達が元気になってくれればそれが一番だよ」

アスラン医師は顔の前で手を振りながら頷く。

エミリーをボランティアスタッフの一員に加える事を

最終的に許可したのは彼だった。

「しかし、君たちの勤務している病院は本当にスタッフのレベルが高いね。

ハーカー医師はこのままこの病院に引き抜きたいくらいだ」

「じゃあ、まず佐々木を引き抜く事をお勧めしますよ。彼の行くところなら

彼女はどこまでもついていきますからね」

「ほう、ではハーカー先生は佐々木先生の恋人ですか。

中々隅に置けませんね、どうやってあんな美女を口説き落としたんですか」

「い、いや。そ、それは」

再び顔を真っ赤にしてうるたえる佐々木の白衣の裾がくい、とひかれた。

「アレックス君？」

見れば腕に包帯を巻いた少年が白衣をしっかりと握りしめて佐々木の後ろに

隠れるように立っている。

「どうしたの、君はあそこに行かないのかな？」

腰を落とし、目線を同じくして問いかける佐々木にアレックスは激しくかぶりを振った。

「まだ、彼は無理ですか」

「ええ、爆風で車外に放り出され友達の乗った車両が目の前で燃えていくのを

見ていますからね、他の子とはショックの度合いがケタ違いなのでしょう」

「そうか、まあゆっくりやって行くしかないだろうな。

しかしこれほど楽しそうな子供達の様子は初めてだ。エミリーさんだったか

彼女にボランティアに入ってもらって本当に良かった」

「ええ」

三人の医師達は笑みを取り戻した子供達の様子ばかりに気を取られていて気付かなかった。

アレックスが佐々木の影に隠れながら怯えた表情を

パソコンの画面に写る電車ではなくエミリーに向けていた事に。

続く

第十四話

「ありがとう、子供達のおんな笑顔は初めて見た」

背後からかけられた声に、今はエミリーと名乗るレイラは優しい微笑を浮かべて

振り返る。心中でその主の単純さと善良さを嘲りながら。

「私なんかでも、役に立てることがあつてよかったです」

はにかんだようにうつむいたレイラの視線の先には、電源を入れ、インターネットに

接続したままのノートパソコンがある。液晶画面には動物たちの乗り込んだ電車が

物悲しい音楽をBGMに走り続けていた。

「そんな事言わないでよ、俺はその、すごく君に感謝している。パソコンは

付けっぱなしで大丈夫なの？」

「王先生は本当に人をほめるのが上手、職業のせいかしら。ええ、新しい

ウェブ絵本をダウンロードしているんです。この病院でネットに接続できて

助かりました。友人宅は未だにネット環境が整っていないくて」

「そうなのか。でも、ロシア語の表示にアメリカの歌なんて面白いねそれとも何か意味でもあるのかな？」

首を傾げた王に、レイラは内心で舌打ちをする。妙な所で観察眼のある医者だ。

「さ、さあ。検索で見つけたサイトですし、ロシアも今大分この国の資本が

入り込んでいるから。開発者の趣味かもしれませんね」

「『DESPERADO』か、趣味だとしたら随分と渋いね」

「え？」

「曲の題名だよ。名曲だけど、あんまり子供向け。でもないよな」
首をかしげる王にレイラは曖昧な笑みで答え、パソコンを閉じた。
この画面だけでは、ダウンロードしている本当の内容など判るはずもないが
色々と突っ込まれても面倒だ。幸い王はレイラの仕草に何かを感じたらしく
それ以上の質問はしてこなかった。
女性に優しい男は本当にありがたい。後でたっぷり後悔することになるだろうが
それはこちらの知ったことではない。
「これから何か予定があるの？」
「いいえなにも」
首を振ったレイラの手には、王はそつと自分のそれを重ねた。
「もしよければ、今日も夕飯に付き合ってくれないかな。
子供達に笑顔を取り戻してくれた人に、せめてものお礼をしたいんだ」
「そんな、演劇学校の授業でやったことを先生のアドバイスに従ってアレンジしただけなのに」
驚き、戸惑う表情を浮かべながら、レイラは心の中で高らかに嘲笑する。
本当にこの国の男は誰もかれもがヒーロー気取りで自己中心的な優しさに
あふれているのだろう。まあいい、精々鼻の下を伸ばして短い王子様気分を
味わってればいい。自分の正体を知った時の王の驚愕と絶望を想像すると
自然と笑みが浮かぶ。
それを誘われた嬉しさに見せかけて、レイラは頷き
「でもせっかくのお誘いですから、喜んでお付き合いさせていただきます」

と答えた。

「美談……なんでしようけどね」

王とエミリーが楽しげに話をしている様子を少し離れた場所で眺めていたミナは、複雑な表情で呟いた。

王が女性全てに優しいのは昔からだし、エミリーも片親がイラク人とはいえ

この国で育ったアメリカ人だ。身分証明証も問題はなかったし子供達の扱いも慣れているらしい。偶然の出会いが生んだ心温まる出来ごと

となのかもしれないが、ミナの中でエミリーの存在は

喉に引っかかった魚の小骨のような奇妙に不快な違和感があった。

いくら友人の元に身を寄せているとはいえ、

予期せぬ長期滞在を強いられた旅行者が

ボランティアなどする心の余裕があるだろうか。しかも王と出逢っ

たところは

ガイドブックによれば治安が回復してきたと報じられている

ニューヨーク市の中でも有色人種の低所得者達が固まって住んでいる、危険地域だ。

エミリーはそんな場所で何をしていたのだろう。病院に提出した書類をこっそり

見てみたが、友達の家とやらの住所はそこから大分離れた場所だった。

「それに、何処かで見たことがあるのよね」

特にあの切れ長の瞳が。しかしそれは明け方に見る夢のように酷くあやふやで

頼りない記憶でしかない。

視線の先で二人が同時に笑い声を上げる。その様子にミナは唇を強

くかみしめ

そしてその痛みにじわりと胸の奥から自己嫌悪が湧きあがった。まるでティーン少女のような嫉妬だ。自分が佐々木を選んだようにずっと

影のように自分を支えてくれた従兄弟にも、

ステイディな恋人を持つ資格があるというのに。

一つ頭を振って気持ちを切り替え、その場を立ち去ろうとした時ミナはぽつんと廊下の椅子に腰を下ろす小さな人影を見つけた。

細い腕にしっかりと巻きつけられた包帯が痛々しい。

たしか、佐々木の受け持ちの患者でアレックス君と言ったはずだ。

「どうしたの、こんな所で。病室に帰りましょうか」

しゃがみこんで視線を合わせ、優しく話しかけたとたん

アレックスが首にしがみついていた。

「どうしたの？」

「怖いよ」

耳元で聞こえた声は掠れ、小さな体が細かく震えている。

「なにが？あの日の事を思い出したの？」

「うつん、あの女の人」

「え？」

「あの人、ケーキの人だ。髪の色は違うけど、ケーキの人だよ」

泣きじゃくりながらいい続けるアレックスの背中を優しくたたいて気持ちを落ち着かせながら、ミナの心の中で自分の嫉妬のせいにして無理に

押さえつけたエミリーへの疑いが再びふくれあがっていった。

続く

第十五話

「エミリーさん。朗読劇は終わったの？」

翌日、集まっていた子供達が病室に帰ったのを見計らいミナはエミリーに話しかける。

「え、ええ」

少し戸惑ったようにエミリーは頷き、じゃあ、とミナは彼女に笑いかけた。

「よかったらお昼と一緒に食べない？」

「あの、私、王先生と」

エミリーは今まで、ボランティアの時間を除くほとんどを王と行動を共にしていた。

「陰月は今少し面倒な患者さんを診察してもらっているの。まだ大分かかるわ。」

あ、自己紹介がまだだったわね。私はミナ・ハーカー、陰月の従姉妹で小児内科医、

カリフォルニアの同じ病院に勤務しているの」

「……そうですか」

切れ長の瞳の奥に浮かぶ強い猜疑心にミナは不信感を募らせる。

何をそんなに警戒しているのだろっ、彼女は。

「貴方の朗読劇をずっと見せてもらっていたんだけど、とても子供の

心をつかむのが上手いのね。感心したわ。

私は小児科医の癖に今一そういう事が苦手で

ね、もしよければその辺りのコツを少し教えてもらえないかしら」

「……」

渋る表情を浮かべるエミリーにミナはさらに畳みこんだ。

「それとも、陰月以外とお昼を食べたくない理由でもあるのかしら？」

その言葉に、ブルーの切れ長に瞳がじつとミナのアーモンド形の瞳を覗きこむ。

まるで心の奥底まで見透かそうとするようなその眼差しに、ミナは背中に冷や汗が伝うのを感じた。

「いいわ。どこにいきましようか」

エミリーがそう言ったのは、たつぷり五秒も経過したところだろうか。「今の時間カフテリアは混んでいるから、屋上に行かない？ 天気もいいし」

この提案に今度はすぐにエミリーは頷いた。

「はい、ポークとチキンどっちがいいかしら？」

屋上のベンチに二人並んで腰をおろし、ミナが売店で買ったサンドイッチを差し出す。

「じゃあ、チキンを」

「ムスリム？ ではないわよね。髪を隠してはいないし、お祈りをしている様子もないから」

「ええ」

サンドイッチのビニル包装を破きながら、エミリーは頷く。

「父はイラク人でしたけど、私の国籍はアメリカですから。教会の方がなじみ深いくらい」

「そう。エミリーさんのお父様って確か数年前のハリケーン、カトリナで……」

「はい、亡くなりました。両親ともです。」

そのお陰で私はシカゴに勉強にでてこれたんですけれど、そう言っただけで悲しげな表情でエミリーは俯いた。

「ああ、ごめんなさい、辛いことを思い出させてしまって。」

あのハリケーンは後1日政府が避難するためのバスを早く派遣すれば、

もつと大勢の人が助かったって今でも言われているわね」

「はい」

「テレビで見たんだけど、やっと派遣されたバスに大きくI社の広告が入っていたのは

驚いたわ。余り評判のいい会社ではないとネットではいわれていたけれど、そこまでして

宣伝をしたかったのかしら」

「そうですね、バスの広告めがけて沢山の人が石を投げているのを見ました」

言ってから、エミリーはサンドイッチをかじる。

「ごめんなさい、すっかりしていたわ。それ、ポークなの」

「……!!」

声にならない悲鳴を上げて、エミリーが手に持っていたサンドイッチを

コンクリートの床に放り出し、口の中のものをその上に吐き出した。それと彼女の顔を交互に見つめ、ミナは静かに口を開く。

「どうしてつく必要のない嘘をつくの？ 貴方、ムスリムなんでしょう」

「……それは」

口ごもり、顔を背けるエミリーにミナは続けた。

「それにね、ハリケーンの時に被災地に派遣されたバスにI社の広告なんて

入っていなかった。何度もニュースになったのだから、あの時本当にアメリカにいたのなら絶対に見付く嘘よ」

エミリーの表情が一変した。今にも跳びかからんばかりの凄まじい目つきで

ミナを睨みつける。

「鬘とカラーコンタクトと濃い化粧に誤魔化され続けていたけれど、貴方の顔を

ずっとどこかで見たことがあると思っていたの。

昨日、テレビを見ていてやっと思ひ出したわ。

貴方のその目だけは子供のころから変わっていないのね」

「私が、貴方を入質にして屋上にたてこもるとは考えなかった？」

エミリーの問いかけにミナは首を振る。

「銃も持たずに丸腰で？ ニューヨークの警察を甘く見ない方がいいわよ。」

テロリストの貴方には一遍の容赦もなく、銃弾を浴びせるでしょう。それにここは吹きっさらしでしょう

この季節にコートもなしでここに籠城すればあつというまに低体温症になるわよ。北風で」

「やってみなきゃ、判らないわ。」

貴方を殺してここから逃げるといふ選択もあるのよ」

「一言も叫ばないで殺されるほどかわいい性格はしていないわ。」

ここで叫べばすぐ下は駐車場。

人通りも沢山あるし、警備員も常駐している。逃げ切れるかしら？」

ざりりとエミリーは奥歯を噛みしめる音が微かに響いた。

「五分あげるわ。とつとこの病院から出ていって」

「なんですって」

流石にエミリーが驚きの声を上げる。

「私は医者よ、警察じゃないわ。病院で逮捕劇があれば患者さん達が動揺する。」

特に子供達がね、それに」

ミナは少し苦い表情でエミリーを見返した。

「陰月に、子供達に笑顔を取り戻してくれたボランティアの正体を最悪の形で

教えたくはないから。私はこれから警察に電話をしに行くわ。私の姿が消えるまで

そこで動かないでね。一步でも動いたら大声を上げるから。あ、貴方が食べたサンドイッチは

チキンよ、それだけは安心して」

早口で一氣にいいきると、ミナはそのままドアまで後じさり素早く身を翻すと鉄製の扉の向こうに消えた。

ミナが鉄の扉に消えるまで、その姿をずっと睨みつけていたレイラは鉄の扉がきしみを上げながら閉まると同時に堪え切れぬように笑いだした。まったく、

どこまで甘ちゃんなのだ。この国の人間達は。患者を刺激したくない？王医師が自分を善良なボランティアだと信じている？

たったそれだけの理由で、自分を見逃せば

この凶悪なテロリストが感極まって自首するとも思っているのか。「本当に、おめでたい連中だわ」

病院の入口には金属探知機が設置されているが、そんなものを誤魔化して銃を持ちこむ手段などいくらでもあると言うのに。

そして、二つの切り札のうちの一つ、C-4は更衣室のロッカーの中だ。

もう一つは……

「しょうがないわね。元々保険の意味だったし」

と呟いた直後、傍らに置いたノートパソコンから聞いたことのないメロディが流れ出した。

画面を開けると、走り続けていた電車が駅に止まっている。準備が完了したのだ。

「神よ……感謝ます」

短い祈りの言葉をレイラは画面に向かって放つ。切り札はそろった。パソコンを胸にだいてゆつくりと階段を下りる。さて、王医師はどこにいるのだろう。

彼にはとびきりの特等席でこのショーの一部始終を見学していて欲しい。

「あれ、どこに行っていたの？お昼は食べた？」

5階に下りたとたん掛けられた声に、レイラは満面の笑みを返す。

「ええ、王先生。すいません少しお時間をいただけませんか。明日から

新しい朗読劇をしたいんですけど、子供達に聞かせる前に先生に聞いて欲しくて。

新しい教材もダウンロード出来ましたし」

その言葉に、彼女の事を微塵も疑っていないらしいお人好しで善良な精神科医は

お安い御用だと頷いた。

「じゃあ、余り人目に着かない所で」

とレイラが王を導いたのは、病院の裏手、負傷者が運ばれたS教会の隣に

うち捨てられたように建っている、レンガ造りの建物だった。

この廃屋が、これから全国、いや、全世界の人々が注目する檜舞台になる。

「これは、古い精神病棟かな。よく見つけたねこんな場所」

感心したように建物の中を見まわす王の背中に、冷たく硬い銃の筒先が

突き付けられる。

「両手を頭の後ろに組んで、そのまま動かないでくださる。王先生」

「エミリー、何の冗談？」

この期に及んで王の声色は明るい。

「残念ながら冗談ではないわ、それに私はエミリーではなくてレイラ。

改めて自己紹介をさせていただくわ。イラク出身でイスラム系過激派のテロ組織

「ハマス」のメンバー。ついでにこの間の地下鉄爆破テロの主犯、でもあるわ」

「……悪夢なら、覚めて欲しいね」

その言葉に、レイラは冷たい笑みを浮かべる。

「残念ながらこれは現実よ。先生には感謝しているわ。次のテロの最高の舞台とそれを実行するための切り札を作る時間をくれた。」

だから特等席でこのショーを見ていただこうと思って。席料の代わりに

まずこれを着ていただいてよろしいかしら？」

とレイラが鉄棒だけが残ったベッドの下から、大きなかばんを引っ張り出し

その中からダウンジャケットのような物を取り出した。

「Yシャツと白衣だけじゃ寒いでしょう。もっともこれもダウンの代わりに

詰まっているのはC - 4ですけどね」

続く

第十六話

「佐々木先生」

午前中の診察を終え、一息つこうと廊下の隅の自販機にコインを入れようとした佐々木は、掛けられた声に振り返った。

「ああ、ケネス刑事。でしたよね」

初老の黒人の刑事はええ、と頷いた。

「勤務中何度もすいません」

「いえ、今丁度一区切りついた所です」

佐々木が自販機からコーラの缶を取り出すと、ケネスも投入口にコインを入れた。

「その後、アレックス君はいかがですか」

無言で顔を曇らせた佐々木に、ケネスは

「あまり、よくないようですね」

と続ける。

「ケネスさん達が来る前までは、少しづつではありますが子供本来の明るさを取り戻してきていたんですが、

ここ数日はまた酷く何かに怯えるようになってしまつて……」

「おや、我々はとんだ疫病神だったようですね。

マイクの質問の仕方は確かに早急すぎました」

「いえ、そんなつもりで言つたわけじゃないんです。

すいません、お気に障つたら謝ります」

その言葉にケネスは少し驚いたような表情になった。

「どうしたんですか？」

「そういえば、先生は日本人でしたね。英語が堪能なのですっかり失念していました。その、正直に言つと怒鳴られる事を想像していたのです」

「ああ、よく同僚にも言われるんですよ。なぜお前はすぐに謝るのかつて。謝っているつもりはないんですが」

「やはり、お国柄ですかね、ですが私は日本人のその、お
オクユ……」

「奥ゆかしい、ですか」

「そうそう、奥ゆかしい態度が嫌いではありませんよ。」

長年自己主張ばかりする輩に囲まれていると、沖縄で過ごした
日々がひどく懐かしく感じます」

「そうですか」

佐々木は頷いて、よろしければ座りますかと傍らの長椅子を示した。
ケネスも頷いて二人は並んでそこに腰をおろし、
缶のプルタブを開けた。

「おっと、失礼」

多分落ちてくる時に缶が揺れたのだろう。吹きだしたコーラが
ケネスの手を濡らす。もう一方の手でポケットのハンケチを
引っ張り出した時、数枚の写真が床に木の葉のように散らばった。
それを、酷い傷痕の残る子供のように小さな手が拾い集める。

「ああ、すいません。先生」

「この写真は……ケネスさんの？」

「いいえ」

ケネスは首を振って、大分くたびれた写真を見る。

「地下鉄爆破テロ事件の主犯、レイラの潜伏先に残されていた
物です。多分家族の写真でしょう」

佐々木もまた、複雑そうな表情で写真を見つめた。

多分写真を取る、と言う事自体イラクでは特別なのだろう。

よそ行きらしい服を着て、少し緊張気味の笑顔を浮かべているごく
普通の家族

そして、まだ小さな子供と軍服を着た男性のツーショット。

「俺はあの日、酷いけが人や無残な姿で息を引き取った人を
嫌と言うほど見ました」

コーラの缶を両手で包んで、佐々木は呟くように言った。

「俺はケネスさんに説明されるまで、こんな酷い事が出来る人間は

俺達とは別世界の、永久に理解できない精神の持ち主だと思っていた
ました」

「そうあってくれた方が、我々はまだ救われる」

やけどの跡のある褐色の指先が、写真の破れた個所を丁寧に貼り合
わせてある

テープをなぞる。

「佐々木先生、テロの後レイラは下町の託児所で働いていました。
赤ん坊の世話が上手で、子供達にも慕われていたと説明されました
よ」

「……そんな人が、どうして」

「彼女はきつと国にいたころは、何処にでもいる善良で平凡な
妻であり、母であったのでしょう。恐らく二度の戦争が
彼女をテロリストと言う名のモンスターにしてしまった。

そして、正義の名の元に戦争を仕掛けたのはこの国ですよ」

「だとすれば、俺にも責任の一端があるのかもしれない」

ケネスの苦しい表情をしばらく見つめた後、佐々木は言った。

「先生が、どうして？」

「同時多発テロの後、イラクに宣戦布告をしたこの国に真っ先に
追従したのは、日本だったんですよ」

そしてそれは、大した議論もされずまるで心太のようにするりと
国会を通過してしまった。半世紀前自国が支持を表明した大国に
焼け野原にされたことなど、忘れ果ててしまったかのように。

「正義って何なんですかね」

「私にもよく判りませんが」

とケネスは首を振った。

「ただこれだけは言えます、自ら正義を叫ぶ奴は碌な奴がい
ない。レイラも、この国も今でも無言で叫んでいますよ己の正義を」

人は、自分が正義と確信した時最も残酷になる。

そう書きしめたのは誰だっただろう。

「……なるほど」

佐々木が淡い苦笑を浮かべた時、ミナが息せききつて階段を駆け下りてきた。

「ミナ、どうしたの？」

「兵衛、王を見なかった？」

「いや、と佐々木は首を振る。」

「朝のミーティング以来見てないよ。エミリーさんとランチにでも言ってるのかな」

と、佐々木の白衣のポケットが震えだした。

「誰からだろう、ああ、噂をすれば王だよ」

なぜか大きく胸をなでおろしたミナに内心で首をかしげながら

佐々木は院内PHSの通話ボタンを押した。

「もしもし、王、どこにいる？何の用だ？」

「佐々木先生で、よろしいかしら」

耳に忍び込んできた聞き覚えのある女性の声に佐々木は面食らった。

「エミリーさん？」

「レイラと呼んで下さるかしら。先生、この名前はよくご存じよね」
手と足の先がゆっくりと冷たくなっていく。

「電池がもつたいないから、用件だけ伝えるわね。警察は呼んでくださって

けっこうよ。まず、王医師は私と一緒にいるわ、ただし人質としてだけ」

PHSを耳にあてたまま蒼白になった佐々木を、ケネスは怪訝そうな顔で

そしてミナは今にも泣き出しそうな顔で見つめた。

続く

第十七話

一時間もしないうちに、M病院の周辺は
パトカーやマスコミの車両に取り囲まれた。

上空には何機ものヘリコプターが旋回し、

病院の職員達がそれを不安げな表情で見上げている。

様々な想いを籠めた視線が注がれているのは、

S教会の裏手に建つ廃屋となった精神病者隔離病棟。

何十年も前にその役割を終え、ひっそりと朽ちるのを

待ち続けていたような小さな建物に今、全米、いや、世界中が注目
している。

「テロリストからの追加の要求は？」

「いえ、今のところ最初のものだけです」

慌ただしく交わされる警察官たちの言葉を、佐々木は透明な壁で隔
てられたような

奇妙な非現実感の中でぼんやりと聞いていた。

病棟に一番近く、そして死角になっている場所に設置された対策本
部。

佐々木がそこにいるのは、犯人からの電話を一番最初に受け、
そして人質ともっとも親しい人物だからだ。

机の上に並べられたいくつものモニターやパソコンの一つからは、
病院の門前で興奮気味に喋るレポーターが映っていた。

音声は消されているので何をしゃべっているのかは不明だが
画面右上にでている王とその下の

「レストラン・キングチャイニーズ」の店舗の写真から、
人質の身元を説明しているのだと想像がつく。

と、画面が切り替わり一人の老人に何本ものマイクが付きだされて
いる映像が映る。

「陰月の祖父、キングチャイニーズグループの総裁よ。」

マスコミは本当に早いわね、こういう時は」

いつのまにか隣に立っていたミナがそつと耳元で囁く。

「ミナ」

「子供達の避難、終わったわ。動揺を与えないために訓練と伝えて
いるけれど。」

何時までだませるかしら。

……私が、あの時すぐに通報していればこんなことにはならなかつ
たのに」

そう言つて両手で顔を覆うミナの両肩を抱いて、

佐々木は古ぼけてはいるが堅牢なレンガ造りの

建物をみつめる。その中にいるのは親友と、

つい二時間ほど前までは子供達を朗読劇で

楽しませていたボランティアのエミリー。

彼女が実は先日爆破テロを引き起こしたテロリスト

レイラだと本人から告白されても、

佐々木はまだそれを心の片隅では信じられずにいる。

グアンタナモ米軍基地に拘束されている「テロ組織壊滅」の為の情

報収集が目的で

拘束されているイラク人達の即時釈放とイラクに駐留している米軍

の完全撤退、

その期限は三時間。要求が叶わない時には

人質殺害の上……。

「いくらアメリカ人と名乗っていても一目で中東系と判る人間をボ
ランティアとして

迎え入れるなんて、危機意識が薄いにもほどがある」

聞き覚えのある怒鳴り声が佐々木を現実に引き戻した。

少し離れた場所でアスラン医師に先日病室までアレックスを

訪ねてきた白人の刑事がくっつかかっていた。

「聞けば、彼女を病院に紹介したのは人質になっている医師だとい
うじゃないか。」

医者というのはそんなに世間知らずなのか、それとも色仕掛けにひっかかったのか？」

その言葉にさすがの温厚な佐々木も頭に血がのぼった。

彼女をここに連れてきたのは確かに王で、

それは言い逃れが出来ない落ち度であるが

そこまで侮辱される理由にはならない。

近寄ってくる佐々木に刑事が気づいた。

「あんたは、この間の。何か言いたいことでもあるのか」

ある、と言いかけた時

「やめるマイク、いくらなんでも言っていていいことと悪い事がある」

と白人の刑事の肩にやけどの跡の残る褐色の手が置かれた。

「……すいません」

厳しい顔をするケネスにマイクは意外なほど素直に謝った。

「失礼しました、佐々木先生」

「いえ、マイク刑事の怒りは理解できます。確かにこの病院に

彼女を連れてきたのは王ですから。でも彼は決して危機意識が薄か

ったわけでも

色仕掛けに引かなかったわけでもありません」

「そうだ、我々は彼女のIDと学生証をきちんとチェックし、両方

とも

本物だと確認できるのでボランティアとして院内に向かえたのです」

佐々木の言葉をアスラン医師が引き継いだ。

「そのIDを発行した州は……」

「ニューオーリンズ州です。写真も加工された様子はありませんで

した」

「くそ、あいつは本物のIDを加工する技術も……」

「違うわ、カトリーナよ」

歯ざしりするマイクの横で、ミナが口を挟む。

「あのハリケーンでニューオーリンズの市内は殆ど水没、死者は数千人もでたのよ。復旧が一段落した時、役所には

ＩＤを失った人が大勢再発行を求めて押しかけただろうし、その中には身分を証明するものを全て失った人も多かったでしょう。役所の審査だつて当然甘くなつていたはずよ」

「なるほど」

ケネスが感心したように頷く。

「多分レイラと同じ年頃のイラク系アメリカ人が実際にいたんでしょう。レイラはそれに目をつけて混乱に乗じて

入れ代わつたのよ。そして学校の中にはお金さえ払ってくれば授業に出席しなくても在校を認めてくれる所もあるわ」

「その話が本当だとすれば、あの女はなんて悪知恵が働く奴なんだ」すぐそばの椅子を乱暴に蹴飛ばして、マイクが呻くように言った。

佐々木の脳裏に昨日子供達相手に笑顔で朗読劇を演じていたレイラの姿が

浮かぶ。ミナの説明を聞いて、佐々木にはその笑顔が今では仮面に思える。

エミリーと言う名の仮面をかぶつたその下で、彼女はどんな表情を子供達に向けていたのか

それを想像すると背筋が寒くなった。

と、机の上で佐々木のＰＨＳが低いうなり声を上げる。

そこにいた全員がぴたりと黙りこみ、はりつめた緊張がその場を支配した。

「電話を取って下さい、Ｄｒ佐々木」

警官に促され佐々木はＰＨＳを取る。テロリストに余計な情報と苛立ちを与えぬよう

電話は佐々木が取るようにと指示されていた。

通話ボタンを押すと、美しいが冷たい声が耳に飛び込んでくる。

人とはこんなにも声をかえることが出来たんだと、佐々木は妙な所で

感心した。

「レイラさん？」

「ええ。佐々木先生、アメリカ政府は要求を呑んでくれたかしら」
その言葉にちらりと佐々木は居並ぶ警察官たちを見る。
彼らはまるで心を読んだかのように一斉に首を振った。

「いや」

「そう、ではあと二時間三分後にニューヨーク上空に旧ソ連製の
核弾頭をつんだ軍事衛星が落ちるわね」

「レイラさん、その」

「王先生は元気よ。また一時間後に電話する」

一方的に通話は打ち切られ、ツー・ツーという音だけが佐々木の耳
の中に残った。

佐々木が会話の内容を伝えようと、警察官たちは輪になって早口で
対応を協議し始める。

「核爆弾なんてものを持ってこられてもかえって現実味がないな」

「でも、いくら核だつて宇宙空間からうちこんでも

大した被害は出ないはずなのに。どうして」

「そうなの？」

驚く佐々木にミナは頷く。

「彼女がどうやって衛星をニューヨーク上空に落とそうとしている
のかは

判らないけれど、大気圏に突っ込んだ時点で衛星は摩擦で燃え上が
り、

核爆弾はそこで爆発する。でも高度大気圏でそれが起こっても
爆風や熱線、衝撃波や放射能の殆どは地上に届かないはずよ」

「じゃあ、単なる脅しで……」

「とは言いい切れないよ」

唐突に聞こえた鋭い声に二人が振り返ると、そこにはアメリカ陸軍
の制服を

一部の隙なく着こなした精悍な顔の男性が立っていた。

「中々お詳しいようだが、貴方は大切なことを見逃しているええと
Dr……」

「ミナ・ハーカーです」

「佐々木兵衛」

男は大きくうなずいて言葉を続けた。

「私は陸軍第21特殊部隊指揮官タガード大尉だ。

この件はこれより軍部が解決に向けて指揮をとることが決定した。
私はその責任者だ」

続く

第十八話

ダガートと名乗った軍人は切れ長の薄青の瞳で二人をじろりと一瞥する。

色素が薄いせいだろうか、佐々木にはその眼つきが酷く冷酷に感じられた。

「確かに高度大気圏ならば、たとえ核爆弾と言えども熱線や衝撃波は地上には届かない。だがその代わりに別の物が地上に降り注ぐ」

「それは？」

「EMP（電磁パルス）だ」

「テロリストの狙いは電子機器、だわ」

再び呟いたミナに、ダガードは御名答と頷いた。

「核爆弾がニューヨーク上空で爆発した瞬間に、大気全体がスイッチを入れた

電子レンジと同じ状態になる。

殆どの電子機器は過電流や過電圧で破壊されるだろう。

しかもテロリストがタイムリミットに定めた二時間後は

ニューヨーククローズ（ニューヨーク株式市場取引終了時間）

で大量の取引データが動く

そんな時にコンピューターが使用不要になったら、国際経済は大混乱に陥り

アメリカの信用は失墜する。対処の仕方によっては国家崩壊すら考えられる

最悪に事態だ」

淡々と述べられる説明に佐々木は目眩を感じた。

この病院にはテロの被害者の他にも精密医療機器で命を繋いでいる患者達がいる。

もしその全てが使用不能になったら……。

「冷戦の最中、旧ソ連は気象衛星を装って核弾頭を装備した軍事衛

星を複数

打ちあげたが崩壊後のどさくさで、その制御プログラムが
どうやら武器商人の手に渡りそれを「ハマス」が買いついたのだろ
う。

二十数年前の制御プログラムだ。

今のノートパソコンのスペックがあれば十分に動かせる。

ホストコンピュータからのダウンロードに少々時間はかかるだろ
うがね。

この病院からロシア某所にアクセスした痕跡がはつきりと残ってい
たよ」

「じゃあ、レイラさんが持っていたノートパソコンの中に」

佐々木の言葉にダガードは再び頷いた。

「制御プログラムがダウンロードされているはずだ。衛星を止める
には

そのパソコンに直接緊急停止命令を打ち込むしかない。Dr・佐々
木。我々はこれから

その為の作戦行動に移る。貴方にはもう少し話を聞かせてもらった上
作戦に協力して頂けるとありがたいのだが」

穏やかだが有無を言わせぬ響きがこもった口調に、佐々木は頷くし
かなかった。

「随分と外が騒がしくなってきたね。まあ、当然か」

「冷静ね。まあ泣きわめかれるよりはましだけど」

呆れたようなレイラに、王は引きつったような苦笑を浮かべた。

「泣きわめいて事態が好転するなら、いくらでもそうするさ」

肩をすくめると、白衣の下につけられたダウンジャケットが耳障りな
音を立てる。

「これ、ぬいじゃ駄目？重いばかりでちっとも暖かくないんだけ

どさ」

「どうぞ、でも先生が脱ぐ前にスイッチを押してあげるわ。脱ぐ手間が省けるし、

寒さも感じなくなるわよ、多分」

目の前に突き出された起爆装置を見て王は首を振った。

「やめとく。ちよつとやそつとでは死なない自信はあるけど、爆弾で粉々にされちゃ流石に死にそうだ」

「こんな時にまで冗談？先生は案外肝が据わっているのね
それとも現実を受け止めきれないのかしら？」

「核爆弾だ、C - 4だと言われてもピンとこないのは事実だね」

その答えをレイラは鼻先で笑い飛ばした。

「本当にこの国の人は何処までお目出たいのかしら。戦争を仕掛けた国の

空から山のように爆弾を落としているくせに。でも先生には感謝しているわ。

貴方が病院に入れてくれたおかげで残りの制御プログラムをダウンロードできたのだもの」

「教育ソフトに偽装して送ってくるなんて随分と悪趣味だね」

「女子供が隠れた防空壕に劣化ウラン弾を撃ち込むこの国といい勝負ね」

冷笑を浮かべるレイラを王はしばらく無言で見つめ、小さくため息をついた。

「まだ俺は信じられない」

「何が？」

「子供達に笑顔を取り戻してくれた人が、テロリストだったなんてレイラのヒステリックな笑い声が部屋いっぱいに響き渡った。

「私だって生まれながらのテロリストだったわけじゃないわ。

貴方の国が仕掛けた二度の戦争が、私をこんな風にしたの。

世界の警察を気取っている貴方達には一生涯理解できないでしょうけど、

両親と弟、それに夫と子供。二度も家族を奪われれば善良な一市民でも

銃をとるわ。復讐のために」

笑いながらレイラの両目からは涙がこぼれおちる。

「それは、辛かったね」

王がそう言ったとたん、銃を握り締めたレイラの手がその頬を殴り飛ばした。

「薄っぺらな同情心を二度と口にしないで、虫唾がはしる」

怒りに燃える瞳が睨みつける先で、王は口の端から一筋血を滴らせたまま

再び口を開いた。

「気に障ったら謝るよ。ただ、俺の祖母も君と同じような目にあつたからつい、ね」

「本当におしゃべりな先生ね。次は昔話？口数の多い男は嫌われるわよ」

「生憎喋るのも仕事の一つなんだ。気が紛れるから続けてもいいかな。

それとも黙っていて、そのうちパニックを起こした方がいい？」

問いかける王にレイラはしばらく考えた後、頷いた。

「いいわ、好きなだけ囀ってごらんなさい。私が聞いているとは限らないけれど」

続く

第十九話

「名前で想像がつくと思うけど、俺の家のルーツは中国だ。1943年、

第二次世界大戦が終わる少し前に祖父と祖母がこの国に移住してきた」

美しいが物悲しいポップスの音色を奏で続けるパソコンを足元に置き、

銃を構えたまま鉄製の扉と、それ以外唯一建物と外を繋ぐ

王が腰かけたベッドの真上の天窓に交互に鋭い視線を向けるレイラに、

王はゆっくりと語りかける。

「国を捨てたのね、恥知らずだわ」

「国に対する考え方は一つじゃない。祖父たち中国人の中には中華鍋一つ背負って

世界中に散って行った人達もいた、それだけの話だよ。

特に第二次世界大戦前後の中国は

政治的にも酷く不安定な状態だった。

国民党と共産党が内戦状態の上、日本とも戦争をしていたんだからね」

「日本？」

レイラは呟いて首をかしげ、すぐにああ、と頷いた。

聞いているかどうか判らないといいつつも、やはり気になるらしい。

「ああ、真っ先にアメリカ力を支持して戦えない軍隊を派遣した国ね。原爆を落とされたのに不思議な話」

王は口元に僅かに苦笑を浮かべた。

「さっきから君が電話で話している佐々木の母国でもあるよ。

あの国には『水に流す』という言葉があるそうだ。

過去の事にいつまでもこだわっていてもしょうがない、
という意味らしい」

レイラは少しむっとしたような表情でそつばを向く。

「俺の祖母はアメリカに移住する前は、中国の南京と言う町に住んでいた。」

首都だった事もある大きな町だったらしいけれど、ある日そこに日本の軍隊が

侵攻して、住民の大部分を虐殺した。もちろん、

その中には祖母の家族も含まれていたよ」

「……」

レイラが再び王の方を向いた。

「たった一人、死体の山に紛れ込んで助かった祖母はそのまま着の身着のままで

上海に逃れ、そこで祖父と出逢ったそうだ」

「そしてアメリカに逃げ出した、と言うわけね。貴方の祖父母は恥知らずの上

卑怯者だわ。自分だけ安全な場所に逃れて、ぬくぬくと暮らして。

天国で

さぞかし殺された家族が嘆いているでしょう」

吐き捨てるように言ったレイラの顔を、王はじっと見つめて静かに問いかけた。

「本当に、そう思う？」

「当たり前よ」

叫ぶようにレイラは答える。

「同じことをされた私は銃をとったわ」

「それが正義だと君は思っているんだね」

「そうよ。私の両親も、弟も、夫もそして子供も。人を殺したわけでも

物を盗んだわけでもない。ただ、イラクという国に暮らしていた。それだけで

ある日突然訳も判らないまま殺されたの。この国の人間に、正義の名のもとに。

これ以上酷い話がある？誰も家族を殺した奴らを罰してくれないのならば、

私がこの手でやるしかないじゃない」

「そう」

王は頷いた。

ほんの二時間前まで楽しそうに子供達に朗読劇を演じていた女性が、今、目の前で怒りに満ちた表情で皮膚が白くなるほど銃を握り締めている。

「地下鉄を爆破して、今度はニューヨークに核爆弾を落とす……。

君はどれだけ人を殺めれば、満足するのかな？」

「……」

虚をつかれたような表情のレイラに、王はさらに問いかける。

「君が殺した人々も、殺人も窃盗もしたことがない善良な人々だったと思うよ。」

そして、殺された人々の家族は、

かつての君と同じ思いを抱いているんじゃないかな」

何も悪い事をしていないのになぜ家族は殺された、と。

「最初に戦いを仕掛けたのはこの国よ！！」

何かを振り払うように激しく頭を振ってレイラは叫ぶ。

「私は孫に何十年もの間、家族を殺された話をする事しか出来なかった

弱虫とは違う」

「いや」

今度は王は静かに首を振った。

「俺の祖母は亡くなる少し前に、初めてこの話を家族に打ち明けたんだ。」

俺も、祖母の息子である父も、いや、

一番長い時間を一緒に過ごしてきた祖父ですら

祖母が天涯孤独であった本当の理由をやっと知ることが出来た」

「……なんですって」

「子供の俺がいうのもなんだけど父は腕のいい料理人で、何人もの弟子を抱えている。

その中には日本人もいるよ。そして、佐々木……俺の親友も日本人だ。

祖母が自分の体験をうらみがましく父や俺に話していたら、恐らくこの関係が築かれる事はなかっただろう。

祖母は憎しみが次の世代に伝わらないように、一人で辛い思いを抱えて生きてきた。それは多分、

テロを実行するより何倍も勇気ある行動だと俺は思う」

「詭弁だわ」

レイラの口調は相変わらず強く、吐き捨てるようだったがその語尾は僅かに震えていた。

「貴方のお祖母さんは、黙っていただけで

心の中ではずっと復讐を夢見ていたかもしれないわ」

「かもしれないね。でもそれは誰にも判らないよ」

「中国人の祖父母を持っていたても、貴方は心の底からこの国の人間よ！

自分の祖母の行動を赤の他人に押し付けようとするなんて」

自らに言い聞かせるように、レイラは言葉を紡いでいく。

「目の前で家族を、愛する人を殺された私の憎しみや悲しみは、同じことを相手にやり返して初めて癒されるの。

いいえ、私だけじゃない。一度は祖国を捨てた同胞が私の考えに賛同し、

自爆テロに参加してくれたのがいい証拠よ。憎しみの連鎖が続くのは不幸かもしれない、

でも最初に戦争を仕掛けたのはこの国よ、矛はそちらが治めるべきでしょう」

「……百人以上を殺しても、癒されないのかい？」

独り言のように王が呟いたその瞬間、銃を握ったレイラの手が思い切りその頬を張り飛ばした。

「百人以上殺しても、癒されないのかい？」

王の呟きが、レイラの心の中の何かを激しく揺さぶった。頭が怒りで真っ白になり、鈍い音に我にかえったとき、

そこには鉄棒だけになったベッドに

うつ伏せに倒れ伏す王医師の姿があった。

自分が彼を殴りつけたのだと気付くのに数秒かった。

両手が縛られているために、思うように身を起こす事が出来ない王医師の姿を見ていると心の中にある穴から冷たい風が吹き出してくるのを感じる。

家族を全て失った時に空いたそれは、いくらテロを重ねてもふさがることはない。

いや、それどころかテロを実行する度により深く、大きくなっていく気がする。

そこからあふれ出る虚無感と憎しみは

いつしか感情の半分以上を占めるようになってしまった。

一体どの位人を殺せばこの穴はふさがるのだろうか？

ふと湧いた疑問に背筋が寒くなった。

なぜだ。今や眉一筋動かさず何百人も殺せると言うのに

私は何を恐れているのだろう。

「君は、テロに依存して家族を失った悲しみから目を背けているだけだと思うよ」

苦勞してようやく上半身を起こした王医師の言葉に、無性に腹が立った。

激情に突き動かされるままに、もう一度医師の頬を思い切り殴りつける。

まるで人形のように、再び王医師は鉄棒だけのベッドに叩きつけられた。

「ニューヨークを更地にしても、君の怒りは収まらない。それどころか

益々激しくなるだけだ。君が自分の心と向き合わない限りね」

二度の殴打にもめげずに喋り続ける医師に、ついにレイラは銃口をその額につきつけた。

「いい加減に黙りなさい。人質という立場を忘れたの？」

そうだ、いい事を教えてあげましょうか。

私は教会でテロの被害者を必死で治療する

先生たちの姿をテレビで見て、次のテロをここでやろうと決めたのよ。

私の家族は、包帯一つ巻いてもらえずに死んでいった。不公平でしょう。

先生には自分が助けた人たちが、もう一度

目の前で死んでいく様をじつくりと見せてあげる

私達の悔しさと悲しさを思い知るがいいわ。さあ、おしゃべりは終わりよ。

次に何か喋ったら、起爆スイッチを押すわ」

レイラは倒れ伏したままの王医師の体を乱暴に引き起こすと、

その唇の端から流れ落ちる血を自らの舌でなめとり、凄惨な笑みを浮かべた。

続く

第二十話

佐々木先生、作戦に参加するというのは本当ですか？」

レイラが王を人質に精神病棟だった建物に立て籠もって二時間が過ぎた。

ケネスの問いかけに、佐々木は緊張で青ざめ強張った顔で小さく頷く。

「あの建物の出入り口は鉄製の扉が一か所だけ。

窓も屋根にはめ込まれ、鉄格子までついた

人の頭が通らないサイズのモノばかりだ。まるで刑務所だな」

その三十分前、急ごしらえの対策本部の中で

ダガードは病院の古い案内図をテーブルに広げ

淡々と佐々木に説明した。

「テロリストの要求は断固として聞き入れるわけにはいかない。

無論、ニューヨーク上空で

核を爆発させることも阻止せねばならない。

テロリストを遠距離から狙撃できれば一番いいのだが、

流石と言おうか、天窓からは人質の姿しか見えん。そこでだ、佐々

木医師」

色の薄い、冷酷な眼差しをまともに受け止めて、

佐々木は背筋に冷たい汗が伝うのを感じながら頷く。

「貴方に王医師を治療すると言う名目で、建物の中に入ってもらいたい」

「……エミリー、いや、レイラが承諾するんですかそんな事を」

「もう承諾は得ているよ。我々の交渉術を甘く見ないでほしいな」

冷酷な視線を今度は彼女達が立て籠もっている建物に向けて、独り言のように

ダガードは言った。

「テロリストは貴方と看護師一名のみの入室を認めた。看護師はこ

ちらで用意する。

無論、本物ではないが」

「その看護師に成りすました貴方の部下が、パソコンを奪回するのですか」

「頭のいい人間との会話は話が早くて助かる。

その通りだ、もちろん貴方と人質の安全は可能な限り保障する」

「断ることなど、出来ませんね」

「ニューヨーク中の電子機器が壊滅状態になり

、人質がモノ言わぬ姿でかえってきててもいいのならば

遠慮なく断ってくれても構わないよ」

皮肉、というには恐ろしすぎる内容を真面目な表情で語るダガードに佐々木は一瞬ではあるが立て籠もっているテロリストよりも空恐ろしい物を感じた。

「判りました」

強張った表情で頷く佐々木に、ダガードは同じ表情のまま協力、感謝すると

抑揚のない声で礼を言った。

「俺はテロリストを油断させるためのカモフラージュですよ。

実際に荒事はからつきしですけどね」

ダガードとは対照的に先日知り合ったばかりの自分を心配してくれる老刑事に

佐々木はなんとか浮かべる事の出来た笑みを向けた。

「本当に、陰月も貴方も最低よ。こんなに私を心配させて」

怒ったような口調なのに、アーモンド形の美しい瞳に涙を滲ませるミナ。

「ごめんよ」

彼女にも笑いかけようとして、今度は失敗した

その瞳を見た瞬間に佐々木もまた泣きそうになる。

今朝、三人で和やかに談笑しながらホテルで朝食を採った。あれから数時間しかたっていないのに

なぜこんなことになってしまったのだろう。

「出来る限り自衛はした。初めて来たんだけど防弾チョッキって重いね。」

めったにない経験だよ」

掠れた声で絞り出したヘタなジョーク。

それにミナは益々怒ったような口調で

「八十人」

と答えた。

「え？」

「貴方と陰月の患者さんの合計よ。」

それだけの人が貴方達の治療をカリフォルニアで待っているのそれを、忘れないで」

「そうだね、帰ったら休みを返上して働かないと」

そう言つて佐々木は付き合い始めたころと変わらないぎこちなさで、恋人の唇に自分のそれを重ねた。

「そうだね、帰ったら休みを返上して働かないと」

精一杯明るい口調で言ってから、不器用に恋人に口づけをする佐々木医師をこれ以上

見ている事が出来きず、ケネスはそつとその場を離れた。

無力感が重い鉛のように全身にまとわりついている。

自分達の力不足で、彼らが新たなテロに巻き込まれてしまった。

腹の底から湧きあがってくる自分とテロリストへの憤りに厚い唇を切れるほど噛みしめた時

「……人質と佐々木医師は必要とあれば射殺して構わん」

携帯電話に向かって告げるダガードの声が耳に忍び込んできた。

「作戦の目的は衛星の制御プログラムをダウンロードしたパソコンの奪回だ」

そこまで喋って、ケネスの視線に気づいたのか色の薄い冷酷な光が宿る瞳が

ゆっくりとこちらを向く。

「医師二名とニューヨーク市民全ての命」

やはりゆっくりと携帯電話を耳から放しながら、ダガードは独り言のような口調で

ケネスに告げる。

「どちらを優先するかは考えるまでもないだろう。

我々は、最善は尽くすが全能ではないのだから」

感情を全く読み取ることができない表情と声音で喋り続けるダガードの頭部には

鮮やかな緑色のベレー帽が乗せられている。

陸軍特殊部隊、通称グリーンベレー。

熱帯のジャングルの国で素朴な農民たちだったゲリラに対抗してこの国が作った

特殊戦闘部隊。

ケネスは彼の言葉の中に傲慢な大国の論理を感じ取り、再び腹の底が熱くなった。

今度は怒りで。

「より多くの人々の安全のために」

これをお題目に、この国は世界中のありとあらゆる場所に軍隊を送り込んだ。

東の果ての小さな島国を占領した時の余りにも鮮やかな成功が忘れられなくて、

亜熱帯のジャングルの国で同じ戦法をとり、手痛い失敗をしたのに、その事だけは

さつさと忘れ去って、砂漠の国で同じことを繰り返した。

作戦は成功し、砂漠の国は独裁国家から民主主義国家に生まれ変わった。

めでたし、めでたし。物語りならばそれで終わる、だが、現実はどう

うだ。

飛躍的に進歩した移動手段によって、テロリストはやすやすとこの国に乗り込んで

このさまだ。

このままでは、二名の医師は尊い犠牲者として守られるべき国に殺されてしまう。

そして、悲劇は微妙にねじ曲げられた美談となり、イラクへの憎悪を付録にして

また国中に宣伝されるだろう。

どれだけ同じ過ちを繰り返せば、この国は目覚めるのか。
気がつけばダガードの姿はすでない。

慌てて作戦本部にもどると、佐々木医師の白衣を着た後ろ姿が
ゆっくりとテロリストが立て籠もる建物に近付いていくところだっ
た。

遅かった。

絶望感に打ちひしがれるケネスの視線の先で、佐々木医師の姿は建
物の中に消えた。

続く。

第二十一話

「大丈夫、大丈夫」

呟き声がようやくケネスを現実に取り戻す。

声のした方を向けば、先ほど佐々木医師と口づけを交わしていた女医が

少し前の自分と同じように建物をじっと見つめながら

自分に言い聞かせるように呟き続けていた。

「防弾チョッキだつて着ているんだし、特殊部隊の軍人さんが一緒なんだから」

ケネスの視線に気付いたのか、そこまで言つて

女医は赤らめた顔に苦笑じみた影を浮かべる。

「ごめんなさい。自分に言い聞かせていないと不安で、可哀しいですよね……」

女医の言葉をそれ以上聞いている事が出来なくて、

ケネスは逃げるようにその場を離れる。

今の自分に出来ることは神に祈る事だけ、

その事実がさらにケネスを打ちのめす。

佐々木医師も王医師も、いやテロリストのレイラですら

突き詰めればこの国の独善的な正義の犠牲者だ。

その犠牲者同士が傷つけあっているというのに、

なぜかつて独善的な正義の先鋒だった自分が安全地帯にいるのか。

「ああ」

こみあげてくる苛立ちを、まるで若造のように拳を握りしめ

茂みの中にポツリと立っていた若木を殴りつける事で誤魔化した時、ひゃあ、とか細い悲鳴が茂みの中から聞こえた。

「君たち、何をやっているんだ」

ケネスの問いかけに、茂みの中に潜んでいた

数人の子供達が気まり悪そうな顔でうつむく。

その中の一人にケネスは見覚えがあつた。

腕を包帯で巻いたその子の名は確か、アレックス。

爆弾が爆発した車両でただ一人生き残った、子供。

「悪い人は、やっつけなきゃ」

ぼつりとアレックスが呟く。

残りの子供が一斉に頷いた。

「やっつけるって、誰を？」

「テロリスト……、友達を、殺した……」

子供特有のたどたどしい口調、だがその表情は

大人がはつとするほどの憎しみに満ちている。

「それは君達がやることじゃないよ。おじさんたちの仕事だ」

その表情をまともに見ることが出来ずに、視線をあらぬ方向に彷徨わせながら

ケネスは言つた。

「でも、おじさん達は知らないから」

「何を？」

再び尋ねたケネスに、子供達は一斉に足元の錆ついたマンホールを指差した。

「こんなものがあるなんて、軍人たちは気がつかなかつたんですかね」

「多分、大分前に使われなくなったものだろう。病院は職員の入れ

替わりが激しいから

忘れ去られても仕方がないさ」

酷く狭い、大人一人が四つん這いになって

ようやく通れるほどのコンクリートで固められた穴を

少しづつ進みながら、ケネスとマイクは囁き合う。

子供達が指差したのは、古い下水道らしかった。あの建物の中に続

いていると言っ。

「それにしても、よく子供達がこれを見つけてましたね」

「子供は何処にでもめぐりこむからな。でも、そのおかげで助かった」

一歩すすむごとに、体に劣化したコンクリートの破片が降り注ぐ。その感触がケネスに暑く湿ったジャングルの国での戦争を思い出させる。

あの時、自分が銃を向けたのはかつては素朴な農民であつたゲリラたち。

そして今、自分が銃を向けようとしているのは、砂漠の国で母であり、妻であつたテロリスト。

繰り返される悲劇の連鎖。

「仕方がない、ことだ」

ペンライトの僅かな光をたよりに細い下水管の中を進みながらケネスは呟く。

誰かがやらねばならぬのなら、それはかつて兵士だつた自分の仕事だ。

やがて、横ばいだった下水管が上に向かって垂直になっている場所に辿りつく。

この上が、出口らしい。

コンクリートの細かな破片で白く汚れた顔で頷き合つて、二人の刑事は

ぼろぼろの鉄の梯子を昇り始めた。

パソコンから流れ出る物悲しいポップスの音色に、電話の呼び出し音が混じつたのは

王の話をレイラが暴力で中断してから十分後の事。

「先生、持病があるの？点滴をさせてほしいと言ってきているけど」

「ああ、実は難病でね。一日二回の点滴が欠かせないんだ」

「そんなそぶりはちつとも見せなかったけど」

不審げに問い返すレイラに、王は何度も殴打された頬に苦笑の欠片を浮かべる。

「病気は隠す主義でね」

レイラはそう、とだけ答えてまた電話に向かって喋り出す。

何度も駄目よ、無理とレイラは繰り返していたが、やがて大きく舌打ちをする

「わかったわ、佐々木医師と看護師一名の入室を許可します」

と忌々しげに言って電話を切った。

「佐々木が来るのか」

「ええ」

とレイラは頷く。

「でも、先生は口をきいては駄目。少しでも妙なそぶりを見せたらすぐに起爆スイッチを押すわ」

「……わかった」

それからさらに無言の時間が流れ、

「佐々木だけど、入るよ」

小柄な医師が錆ついた建物の扉を開けた。

続く

第二十二話

「水や軽食も持ってきた」

「必要ないわ。点滴だけしたらさっさと出て行つて。」

後始末は王医師でもできるんでしょう。まずは両手を上げて頂戴ボディチェックをさせてもらうわ」

硬い表情で頷いて、両手を上げた佐々木の体をレイラが銃を突き付けながら

撫でまわす。

「武器は何も持っていないわね」

「ああ」

「いい忘れたけれど、王先生にはC-4がたつぷり詰まったジャケットを

着てもらっているの。貴方が少しでも妙なそぶりを見せたり王先生に何かを話しかければ、起爆スイッチを押すわ」

「わかった」

頷きながら佐々木はレイラの背後、マットレスをはぎ取られ鉄棒だけに なった

ベッドに座らされている王を見る。

不自然に膨らんだ白衣と酷く殴られたのか、腫れあがった頬を認めてとつさに身体を撫でまわしている女性テロリストの後頭部に上げた両手を

振り下ろしたい衝動に駆られた。

同じように佐々木を見つめていた王が、赤紫色にはれ上がった頬にからうじて笑みらしい欠片を浮かべ、小さく首を振る。

佐々木はそれにはっとして両手に込めていた力を緩めた。

「いいわ、次はあなたね」

佐々木から離れたレイラが、彼の後ろに立っていた逞しい『男性看護師』に

近づいたその時、太いそのうでが思い切り彼女を突き飛ばした。不意をつかれたレイラは、そのまま後ろによろけ

佐々木ともつれるように床に倒れ込んだ。

そこに乾いた音をたてて、固く激しい何かが降り注ぐ。

それが銃弾だと佐々木が理解できるまで、数秒のタイムラグがあった。

鈍い衝撃が胸のあたりに何度も奔る。防弾チョッキがなかったら致命傷を負っていただろう。

「佐々木！！」

悲鳴のような王の叫びと

「作戦協力、感謝する」

機械のように無感情で冷たい声が遠くから聞こえ、

銃弾で削られたコンクリート破片で白く煙ぶる佐々木の視界の隅に、ノートパソコンを脇に抱えと銃を構えた男性看護師に偽装した

兵士の姿が映った。

太いがなめらかに動く指先が、もう一度銃の引き金にかかる。

「撃つな！！やめろ！！」

王の言葉に、兵士はその唇に冷笑を浮かべた。

「お前からでもいいんだぜ」

床に向けられていた銃口がつつと上に向く。とその時

「残念ね、そのパソコンダミーなの」

笑いすら含んだレイラの声がして、腹に響くような鈍い爆発音が上がった。

爆風が王をベッドから床にたたきつけ、佐々木は這うように彼に近寄る。

「佐々木、怪我は」

「大丈夫だ。待っている、今脱がしてやる」

酷い傷痕の残る子供のように小さい手が、引きちぎる勢いで親友の白衣をはぎ取る。

「先生がたもそこまですて下さる？」

鉄さびと埃の匂いが充満する室内に、再び冷酷なテロリストの声が響き渡った。

「あれが見えるかしら」

白い指先が示す先には壁に歪な大輪の紅い花を咲かせ、床に座り込むような形で残った兵士の下半身だけがあった。

「ダウンジャケットに詰め込み切れなかった100グラム程度のc-4でも

このくらいいの殺傷能力はあるの。さあ、

これ以上の無残な姿をさらしたくなかったら

お互いに離れて、そして佐々木先生は両手を前にして立ち上がりなさい。

人質が二人になったわね」

銃をズボンのベルトにねじ込んで、代わりに起爆装置の赤いボタンに指をのせるレイラ。

佐々木と王はぎくしゃくとした動きで、彼女の指示に従った。

「そう、お二人供素直で助かるわ」

レイラがゆっくりと佐々木と王に近付く、

その瞬間、レイラの左肩から血しぶきがあがった。

鈍い衝撃と共に、マイクとケネスの頭上に真っ白な埃が降り注ぐ。

「急ごう」

今にも崩れて砂になってしまいそうなほど錆た梯子をのぼり、重い鉄の蓋を押し上げると、眩しい光がケネスの視界をやいた。何度か瞬きを繰り返すと、徐々に視力が戻ってくる。

幾つも並んだ鉄枠だけのベッド。

どうやらそのうちの一つの真下に出たようだ。

三つほど先のベッドに腰かけた白衣姿がかるうじて見える。

と思った瞬間に、銃声が鳴り響き

「佐々木！！」

という悲鳴のような声が聞こえた。

「作戦協力、感謝する」

非常時とはいえ、何の躊躇もなく

テロリストとそして民間人に銃口を向ける

自国の「正義の兵士」にケネスの背筋を

悪寒にもたおぞましが駆け抜ける。

「やめろ、うつな」

再び聞こえた悲鳴のような声に、ケネスはホルスターから銃を抜いた。

照準を定めたのは、自国の兵士。

だが、ケネスが引き金を引くより早く兵士の脇に抱えられたノートパソコンが

爆発した。

爆風が巻き起こり、鉄さびの匂いのする生温かい液体が雨のように降り注ぐ。

「残念ね、このパソコンダミーなの」

瞬時に出現した地獄のような光景の中、レイラの声だけは何処までも冷たく

美しくすらあった。

もうもうとする土煙がおさまると、そこに姿を現したのは壁に歪な大輪の紅い花を咲かせ、下半身だけとなった兵士とそれを見て、薄笑いを浮かべるレイラ。

その表情のまま、二人の医師に起立を命じた彼女を見た瞬間ケネスはレイラの肩口に照準を合わせ、引き金を引いた。

続く

第二十三話

何度感じても慣れることのない鈍い反動と、空気を切り裂く固い金屬の微かな音

そして、レイラの左肩から吹き上がった血しぶき。

華奢な体をぐらりと揺らせ、彼女は鉄棒だけ残った

ベッドの下から銃の引き金を引いたケネスの方を向いた。

その表情に、かつて兵士であつた年老いた

刑事は息を飲む。

人はこれほど恐ろしい表情ができるのか。

美しい顔立ちをしている分つり上がった眦や

醜く歪んだ口元は鬼気迫る様ですらある。

血の気を失い、微かに震えるレイラの右手が

再び銃を構え、躊躇なく引き金を引く。

放たれた銃弾がケネスの頭上にあるベッドの鉄棒に当たり、朱色の

火花が散った。

「何が起きているんですか！！」

足元のからマイクの不安そうな叫び声が聞こえる。

ケネスがまだ下半身を下水道の中に突っ込んでいるせいで、彼は地

下から出られずにいた。

「すぐに終わる」

叫び返してケネスは再びレイラに照準を合わせる。

彼女は人ではない。この国が生み出してしまったテロリストと言う

名のモンスターだ。

滅ぼしてしまえ。それが、正義だ。

心の奥底から湧き上がる声に押されるように、ケネスは引き金を引

いた。

今度は右の肩から血しぶきが上がり、再び彼女の身体が大きく揺れた。

だめだ。

ケネスは三度照準を合わせる。心臓を打ち抜かねば、モンスターは倒れない。

褐色の指が引き金にかかった。その時

「やめてください！！」

ケネスの視界を白い色が覆い尽くした。

白衣のすそをなびかせて、佐々木医師がテロリストと自分との間に両手を広げて立ちはだかつたと

気付いたのは、引き金を引いた一瞬の後の事だった。

鈍い反動と、固い金属が空気を切り裂く鈍い音。

半瞬の間を置いて赤を基調とした鮮やかな色の組み紐が

宙を舞い、佐々木医師の頬を黒髪とそして一筋の血が縁取る。

「危ない、先生。テロリストに撃たれます！！」

ケネスの叫びに佐々木医師は首を振る。その姿にケネスは苛立つ。

「なぜ、レイラを庇うんですか。彼女は百人以上を殺したテロリストですよ。

人間ではありません。アメリカが生みだしてしまったモンスターです。

せめて我々の手で殺してやるのが正義なんですよ」

叫び続けるケネスが構えた銃口を、

何時の間に近寄った佐々木医師の子供のように酷い傷痕の残る

小さな手が強く握りしめた。

じゅっという音と共に、肉の焼ける微かな匂いが辺りに漂う。

「先生！！」

驚くケネスに佐々木は僅かに顔をしかめただけで、もう一度首を振った。

「レイラさんはテロリストです。でもモンスターではありません。

テロで身体だけではなく心に深い傷を負った子供に笑顔を取り戻してくれた、普通の人間で

そして……もう、これだけ傷つければ十分でしょう」

そう言つて僅かに体をずらした佐々木医師の向こうに、
ケネスは床に倒れ伏すレイラの姿を認めた。

「エミリー……！」

両肩を撃ち抜かれ、床に倒れ込むレイラに王は駆け寄った。

「ジャケットを脱ぐ前に……テロリストの、心配？」

つくづく甘ちゃんね……先生」

「ばか、動くな。出血がひどくなる」

叫びながら王は白衣を脱ぎ、それでレイラの傷口を抑えようとした。
「いないわ」

それを力ない手で払いのけ、そして、王に着せたダウンジャケット
のジッパーを引っ張る。

「……脱ぎなさい。もう、必要がないから」

「エミリー……」

呟く王の表情を見て、レイラは酷く歪んだ笑みに似た表情を浮かべ
た。

「何を、勘違いしているの。……先生の、命を奪う気が、失せただ
けよ。」

あと……1分で……ニューヨーク上空に、軍事衛星が……墜落する
わ」

「なんだって……」

絶句した王に、レイラは震える手先で上着の下からごく薄のノート
パソコンを取り出す。

開かれた液晶画面には、流れ星に乗った動物たちが

徐々に地球に近付いていくアニメーションが

コミカルなタッチで描かれていた。

右下に記された文字は60。それは瞬きすることに数字を減らして

いく。

「あと1時間はあるんじゃないのか」

「……多勢に無勢で戦うには、嘘も必要よ」

「エミリー、地球上すべての人間を殺し尽くしても、君の家族は戻ってこないんだ」

「当たり前な事、言わないで」

そう言つてレイラは自らが作つた血だまりの中に顔をつけた。

「私は、もうすぐ死ぬ。道連れはアメリカの経済よ。天国で夫と子供に……」

ほめて、もらえるかしら」

そう言つて再びレイラは今度は晴れやかに笑つた。

「君は死なせない。そして、テロも実行させやしない」

「できないこと、言わないで。停止プログラムは私も知らないの。」

必要ないから……聞きもしなかった」

そう言つて口をつぐんでしまったレイラの傷口を王は白衣で強く抑えた。

もう抵抗する気がないのか、彼女はされるがままだ。

物悲しいアメリカンポップスが流れる中、

流れ星は地球に近付き続け、数字はその数を減らしていく。

その数が20を切つた時、王は片手で素早くキーボードを叩いた。

びたり、と曲がとまった。アニメーションが消え、

黒くなつた画面に極太の赤字で「STOP」の文字が浮かび上がる。

「……何を、したの」

流石に驚愕の表情を隠せないレイラに、王は

「DESPERADO」

と呟いた。

「何？」

「この曲の、名前だよ。ならず者。アメリカンポップスをロシアのソフトに合わせるなんて

何か意味があると思ったんだ」

「……ダウンジャケット、脱がすんじゃないかったわ。

貴方を……殺すべきだったわね、王陰月」

悔しげに呻くレイラ。

「王、大丈夫か」

「先生、怪我は」

駆け寄ってくる佐々木とケネスに、王は静かに首を振った。

「俺は大丈夫だ。エミリー……いや、レイラに至急治療を……終わ
ったんだ。全部、な」

続く

第二十四話

クリスマスが後数日後に迫った日、ニューヨークに今年初めての雪が降った。

灰色の空から柔らかに舞い落ちる冬の使者は、
ゆっくりと時間をかけて地上を美しい白色で覆い尽くしていく。

ケネスはその様子をM病院8階の窓から見つめながら、

「14日か」

と呟いた。

ニューヨークの上空ではなく、大西洋上に

核弾頭を積んだ旧ソ連の軍事衛星が墜落した日からそれだけの時が流れた。

あの日、全米、いや全世界から注目されていた

レンガ建ての小さな建物は今は周りに人影もなく

雪だけが静かに降り積もっている。

「俺の周りも、早くこんな風になって欲しいものだ」

今度は厚い唇に苦笑の欠片を浮かべて、ケネスはもう一度呟いた。

今や彼は「テロを未遂に終わらせた正義の警官」であり、

ありとあらゆる賛美の言葉が連日雨のように降り注がれている。

マスコミの取材は警察署どころか家にまで押し掛けてくる有様だ。

今日もタクシーを二台乗り替え、やっと追い掛けてくる連中を巻いてここまで来た。

「ケネスさん」

名前を呼ばれて振り返れば、そこに立っていたのは両頬と手に酷い傷痕が残る

小柄な日本人の医師。

「佐々木先生、お久しぶりですね。お元気そうで良かった」

「ええ、ケネスさんも」

笑顔で挨拶を交わして、二人は並んで廊下の隅にある長椅子に腰を

下ろした。

テロが起こった日と同じように。

「先生、怪我の具合はいかがですか」

「ああ、心配かけてすいません。もう殆ど治ってますよ、明日か明後日にはこれも取れるでしょう」

と佐々木は、左手に巻かれた包帯を苦笑して見つめる。

「あの時は本当に驚きましたよ。」

先生は発砲したばかりの銃身を躊躇なく握りしめたんですから」

「知らなかったんですよ。発砲したばかりの銃身があんなに熱くなっているなんて。」

まあ、銃をあんなにまじかに見たのも初めてだったんですけど」

「そうだったんですか」

佐々木につられるように、ケネスもまた苦笑した。

「しかし、そのお陰で私はレイラの命を奪わずに済んだ。礼を言いますよ。」

しかし、先生は勇敢な方ですね。いつ発砲するか判らない銃口の前にいくら防弾チョッキを着ているとはいえ、立ちほだかるなんて」

「勇敢だったわけじゃない、ただ悔しかったんです」

と佐々木は小さく首を振った。

「目の前でこれ以上人が死んでいくのは。」

俺は医師で、人の命を救うのが仕事ですから」

「なるほど」

「ケネスさんは今やすっかり英雄ですね」

「お恥ずかしい話です」

ケネスは俯いて頭を掻いた。

「この国は相変わらずです。英雄を作り上げることばかり熱心で、英雄に倒された『悪者』がなぜ生まれたのか、その訳を少しも考えようとしなない」

だから、ケネスはいくら要請されても、目の前に大金を積まれようとも

翌日の新聞に「警察官として市民を守る当然の務めを果たただけ」と短いコメントを発表しただけで、

その後の取材やメディアへの露出を断固として拒み続けてきた。

「私は単なる殺人未遂者です。いや、殺人者ですね。」

その昔戦争で数え切れないほどの人を殺しましたから。

レイラの事を非難する資格はありませんよ。彼女はこの奥ですか？」

佐々木は頷く。

この病院の8階は特別料金を払わねば入ることのできない個室が三つしかない。

そして今、このフロアにはレイラ唯一人が厳重な監視のもと、入院をしていた。

「手術と輸血のお陰で命に別条はありませんが、まるで貝のように口を閉ざして

何もしゃべらない。今、王が精神面の主治医として治療に当たっています」

「王医師が？」

「ええ」

「そうですか、実は今日ここに来たのは彼女にこれを渡そうと思ったからですよ」

とケネスがポケットから取り出したのは、古びた写真。

あのアパートに残されていた、恐らくレイラの家族を写したモノ。

「私からは渡せません。佐々木先生、お願いできますか」

「はい」

もう一度佐々木は頷いて、ケネスの手から写真を受け取った。

「傷の具合はどう、痛まない？」

「食事もずつと拒んでるんだってね。栄養だけなら点滴で補えるけどやはり口から食べたほうが回復が早いよ」

穏やかに喋り続ける王に、ベッドの上で上半身を起こしたレイラはまっすぐ前を見つめているだけで、返事はおろか、彼の方を見ようともしない。

金髪の鬘と青いカラーコンタクトは取り去られ、僅かに髪が伸び始めた坊主頭が痛々しかった。

「雪が……」

「はやく、殺しなさい」

王の言葉を遮って、何の感情もこもらぬ声でレイラは呟く。
銃で撃たれた両肩の手術を終え、彼女が麻酔から目覚めて以来喋るのはこの一言だけだ。

「それで、君はいいのか？悪魔の化身のようなテロリストと言うレッテルを張られたまま死刑になつてそれで満足なのか？」

問いかけに答えはない。

「早く、殺しなさい」

切れ長の瞳で虚空を見つめたまま、もう一度レイラは繰り返した。
その時

「佐々木だけど、ちよつといいかな」

細く開けられた扉の隙間から、酷い傷痕の残る手が数枚の写真を王に手渡した。

「これは、君の家族かな」

ベッドの上に並べられる、古びた写真。

それを見たたん、レイラの切れ長の瞳から涙が一筋零れおちた。

「言いたい事があるんだろう。この国の人たちにさ」

それを指先で拭ってやりながら、王は再びレイラに語りかける。

「早く……」

「言えよ、せつかくアメリカにいるんだろう。爆弾で人間をいくらふっ飛ばしても

写真を見て泣いていても、君の心の内は誰にも伝わらない。その口

は何の為にある

言葉は何の為に覚えたんだ。今の君は全米、いや全世界の注目の的だ。百人以上の

命と引き換えに手に入れたポジションを無駄にするなよ」

また、レイラが涙を流す。

「早く殺しなさい」

と呟きながら。

「殺させるか、俺は医者だ。壊れた心を治す精神科医だ」

泣き続ける彼女の顔を覗き込みながら、王は続けた。

「俺は絶対に君の心を君の言葉で語らせて見せる。それが、あの日俺の目の前で

死んでいった……俺が救えなかった人々へのせめてもの償いだ」

血を吐くような医師の叫びに、初めてレイラの瞳が王の方を向いた。

「お久しぶりね、王先生」

「ああ、半年ぶり、かな」

分厚い防弾ガラスを隔てて王とレイラは向かい合う。

ニューヨーク郊外にある重犯罪者専門の刑務所。

あのテロから一年半が経過していた。

「判決は、もう知っているわよね」

微かな笑みすら浮かべながら、レイラは問いかける。

その肩口をすっかり伸びた癖のある茶褐色の髪がさらさらと撫でた。

「ああ」

対照的に硬い表情で王は頷く。

「TVで見たよ。残念だな、ニューヨーク市は二〇〇四年に死刑を憲法に反すると

裁定したはずなのに」

「私は百人以上の罪なき人を殺したテロリストよ、当然な判決よ」
「俺はこの国を法治国家だと信じていたよ。上告は？出来るはずだよ」

王の言葉にレイラはゆっくりと首を振る。その表情は穏やかで優しげですらあった。

きっとイラクではこんな表情を家族に向けていたのだろう。と王は思う。

「何度も言っただわよね、私にはもう生きている理由がないと。

それに死刑囚の特権のお陰で先生にまた会う事が出来た」

「そうなのか」

「お礼が言いたかったの、出来れば直接」

「え？」

驚く王にレイラは続ける。

「私は暴力を暴力で返す方法しか知らなかった。でも、ニューヨークの上空に

核爆弾を落とそうとしても叶えられなかった出来事が……」

「叶いそうだろう、今」

複雑な表情で王はレイラの言葉を引き継いだ。

「そうね、私は裁判で自分がテロに奔った理由を語った。たったそれだけなのに」

「イラクからはアメリカ軍が撤退しかけてるし、グアンダナモ基地からは

政治犯が釈放されそうだ。言っただろう、言葉はどんな凶器にも勝るって」

レイラの証言は、何の修正も加えぬまま全米、いや全世界に流された。

まだ若い女性が淡々と語る悲しくも恐ろしい話に

多くの人々が想像力をかきたてられたからかもしれない

米大統領選が迫っていた事も、幸運だったのかもしれない。

ともかく数十分の証言が、何度テロを繰り返しても

実現できなかった事をあつさり成し遂げようとしている。

「ええ。先生の治療のお陰ね。本当にありがとう」

「結局、君は死刑になってしまっただけだね」

苦笑と言うには苦すぎる表情を王は浮かべた。

半年の歳月をかけて、王は頑なに閉ざされていたレイラの心をこじ開け

己の心の内を言葉にする方法を訓練し、

さらに裁判が始まってからも法廷が開かれる度に彼女の側につきし
たがい

その心を支え続けてきたのだ。

「私は、先生を騙して、人質にして、殺そうとまでしたのに」

「言っただけだよ。俺は祖母を尊敬しているって。だから真似をし
ただけだ」

憎しみを連鎖させるのではなく、断ち切る。

「何十年後に、俺の子供がもしかしたら、

君の国の人間と親友か恋人になるかもしれないから」

「私達は無理だったけど」

そう言っただけでレイラは少しさびしげな笑みを浮かべた。

「いつのころからかしら、先生の言葉を心の支えにするようになったのは。」

もう少し早く出合っていればよかったと、思うようになったのは「
……」

その言葉に王は無言で冷たく分厚い防弾ガラスに手を押し付ける。
そこにレイラはそっと自分のそれを重ねた。

「上告しろよ、レイラ」

「レイラ、じゃなくてサウサン……私の本名よ。先生にだけ知って
いてほしかった」

「サウサン」

清涼な響きの名を王が口の中で転がすと、分厚い防弾ガラスで隔て
られた女性はい

まるで初めて恋をした女子学生のように顔を僅かにあからめて、はい。と答えた。

そこに、冷酷無比なテロリストの面影はもはや欠片もない。

「時間です」

冷徹な刑務官の声が、面会の終了を告げる。

「名前を覚えてくれてありがとう、一生忘れない」

その言葉にレイラ、いや、サウサンはもう一度嬉しそうに笑うと、刑務官と共に

分厚い鉄の扉の向こうに消え、それ以後二人があう事は二度となかった。

「……先日レイラ……いや、サウサンの死刑が執行され、どういうわけか

遺髪が俺の所に送られてきた。佐々木、申し訳ないがどこか適当な場所にこれを

埋めてくれないだろうか。せめて髪だけでも故郷の土に帰してやりたくて。

そして、迷惑ついでに一緒にこの種も頼む。

サウサンはイラクの言葉で百合と言う意味らしい。

咲くかどうかは判らないけど、何も無いよりましだろう」

親友から久しぶりに届いた手紙を読みながら、佐々木は同封された小さな包みを開ける。

現われたのは一房の黒髪と小さな種そして、CD。

「Desperado。刑務所の中で彼女が良く聞いていたそうだな俺もあれから時々聞いているんだけど

何となく彼女の事を歌っているみたいだろう」

「……そうだな」

呟いて、佐々木はCDを傍らのデッキにセットする。砂漠の砂で良

く故障するけれど

イラクの難民キャンプでは貴重な娯楽道具だ。

王がアメリカでレイラを治療していたころ、

佐々木は国境なき医師団の一員として妻になったミナと共に、

イラクにやってきた。米軍が撤退してもこの国はまだ平和にはほど遠い。

流れ出した少し物悲しいメロディに、直ぐに近くで遊んでいた子供達が集まってくる。

「先生、それ何の曲？」

「手紙、だから？」

口々に尋ねる子供達の間をゆつくりと歌声が流れていく。

Desperado, why don't you come
to your senses?

You been out ridin' fences fo
r so long now

Oh, you're a hard one

I know that you got your reasons

These things that are pleasin
' you

Can hurt you somehow

（なあ、いい加減目を覚ませよ。

長い間フェンスの上に腰かけて、嫌にならないか。

君は君なりに理由があるみたいだけど、赤絨毯だと思っているそこは
実は茨の上なんだぜ）

「だれかこの辺りで見晴らしが良くて、

ついでに花が育ちそうな場所を知らないかな」

佐々木の問いかけに、次々と子供達が口々に様々な場所を喋り出した。

Desperado, why don't you come
to your senses?

Come down from your fences, open
the gate

It may be raining, but there's
a rainbow above you

You better let somebody love you
before it's too late

(なあ、いい加減目を覚まして、目の前のドアを開けなよ。

向こうは雨降りかもしれないけど、虹だつて出るさ。大切な人の手を握れよ。

手遅れにならないうちに)

第二十四話（後書き）

ここまでお読みいただいておりますが、とうございました。
このお話は昨年別の場所に発表し、一度ここでも発表した作品です。
この度大幅に加筆修正し、ここに完成版として完結します。
ご意見、ご感想を下されば大変うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5298k/>

DESPERADO ~ Dr佐々木シリーズ ~

2010年10月10日20時06分発行